慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	斯道文庫蔵『古今和歌集〔長享三年講釈〕』(零本) 解題と翻刻
Sub Title	A reprint and a study of Kokinwakashuchu (lectured in 1489) housed in the Shido Bunko Institute
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2013
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.48 (2013.) ,p.1- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山城喜憲元教授退職記念#挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20130000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫蔵『古今和歌集〔長享三年講釈〕』（零本）　解題と翻刻

川上　新一郎

はじめに

斯道文庫に室町期の古今集の聞書がある。[1] 首尾欠の零本で巻十六哀傷歌の中途から巻十九雑躰の末尾まで、及び巻十物名の大部分（尾欠）で、それぞれの中途に欠はなく、計二七一首分が存在する。通常、古今集の講釈は巻一から九まで、巻十一から十九まで、巻十、巻二十、仮名序の順に行われるので、現存部分は一連の順序によっていると考えられる。内容を見ると、二度の聞書を収めており、おそらくは初度の聞書を整理して書写し、それに再度の聞書を小字で書入れた原本と思われる。特徴はこの種古今集の聞書には珍しいゾ体で、口語脈が反映され、通常見られないような語句が時に現れることである。講釈の年時は再度のものが延徳二年（一四九〇）、初度はおそらく前年の長享三年（一四八九）と思われる。講者、聴講者は共に不明であるが、後述するように手がかりがある。内容は宗祇系注釈と類似するところがあり、影響は明らかであるが、一概に宗祇系の講釈と言えるかは微妙である。一方、破損、汚損はなはだしく、かつ整理不十分な聞書であるため、文意を含め判読困難な箇所が少なくない。

以上、注目すべき点が多く、かつ複写では判読し難いことを考え、解題とともに翻刻を試みることとした。特異な語句が多

いこともあり、解読に自信のない点が多いが諒とされたい。

一　書誌

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵（〇九一―ト一七八）

古今和歌集〔注〕　存巻十六―十九、十（有欠）

〔長享三年〕写、延徳二年書入　　一冊

袋綴。近時調製の藍色表紙（二五・七×二二・七糎）、左肩題簽、書名記入せず。料紙、楮紙（全丁近時の裏打）。のど部分が著しく窮屈だったため、裏打紙によりのどを足して綴代を作っている。一方、上下は截断の跡があるが、文字はほとんど欠けていない。墨付、四一丁。遊紙なし。字面高さ、約二五・〇糎（和歌本文）。注三―四字下げ。他に同筆の頭注、傍注、注末尾の小字書入注あり。これが再度の講釈である。毎半葉十五―十七行書不等（和歌本文を注より大字で書くため）。内題「古今和哥集巻第十七」「古今和歌集巻第十八（十九、十）」。巻十六は首欠のためなし。奥書なし。但し、裏見返し左下に「四十三□□之」の文字がかすかに見える。本文同筆にも見えるが、意味不明である。印記なし。

本書は料紙折目部分に虫損による大きな欠損があるほか、水浸による紙面の膠着を無理に剝がした際の破損や墨落ち、かび発生による汚損などが見られる。

巻十六の中途840歌より巻十九末尾1068歌までと、巻十巻頭422歌から末尾近くの463歌までの注が存し、その間に脱落はない。

二　成立

本書は零本であるが現存部分には講釈の日付が書入れられており、成立の年時が判明する。左の如くである。

（巻十七巻頭、863ノ前）
　同三年三十一辰
　延徳二〔十廿〕六（小字）
（897歌頭書）
　同二十廿七（小字）
（900歌ノ前）
　同三年二十二（ママ）午剋
（巻十八巻頭、933ノ前）

同三年三十三辰
延徳二十廿八（小字）
（969歌頭書）
延徳二十廿九（小字）
（971歌ノ前）
同三三十四辰（小字）
（巻十九巻頭、1001ノ前）
同三年三十八午
延徳二十一二（小字）
（1028歌頭書）
延徳二十一三（小字）
（1030歌ノ前）
同三年三十九辰
（巻十巻頭、422ノ前）
同三年三廿辰
延徳二十一九（小字）
（446歌ノ前）
同三年三廿一午
延徳二十一十（小字）

これらを月日によって整理すると、二度にわたる講釈であると考えられる。つまり、初度は、某三年三月十一日より三月二十一日まで八回、再度は延徳二年（一四九〇）十月二十六日より十一月十日まで八回である。いずれもその間、日付の飛ぶところがあるが、講釈の量はほぼ均等であり、日付の付落しはないと思われる。

次に初度の年次であるが、「同三年」は延徳二年の前年、長享三年（一四八九）と考えられる。大字で書かれた「同三年」が延徳二年を遡ることは明らかであり、それは長享三年とするのが妥当であろう。初度の講釈と再度の講釈に間隔があくことも想定されるが、長享より遡ると、文明三年（一四七一）ということになり、間隔が開きすぎるからである。また、後述するように、本講釈には宗祇の講釈の影響が認められ、文明三年とは考えられない。つまり文明三年は宗祇が東常縁より『両度聞書』の講釈を受けたまさにその年だからである。(2)

本講釈はそれぞれ八回で二七一首分が講じられており、この進行度合からして、二十巻全部と仮名序の講釈でそれぞれ三、四十回はかかったであろうから、本格的な講釈であったと考え

られる。

また、本書の性格であるが、それなりに筆跡も整っており、清書とは言えないまでも、整理されていると認められるので、講釈の聞書そのものではなく、後の成立と考えられる。

その一方、再度の講釈と思われる小字部分は、やや乱雑で、判読に困難を覚える箇所や、文の接続に乱れが認められるので、講釈を聞きながら直接書入れたものかもしれない。あるいは再度の聞書は別にあり、それを見ながら初度を整理したものに書入れたのであろうか。混乱は余白の不足や、初度の講釈と無理に合体させようとした結果とも考えられる。

なお、念のため一言すると、初度と再度の講釈に特に矛盾は認められず、両者が同一の講者によるものであることは疑えない。

また、本講釈を古今集の注釈史の中におくと、相前後して成立した注釈が多いことに気づく。注（2）の「年表（稿）」を参照すると以下のようである。

長享三年（一四八九）三月十一日～二十一日　本講釈初度（現存部分）

同三月十二日～四月十四日　蓮心院殿説古今集註（栄雅より上野尚長等へ）講釈

延徳二年（一四九〇）三月　古聞（宗祇より肖柏へ）講釈再度

同十月二十六日～十一月十日　本講釈再度（現存部分）

延徳三年（一四九一）十二月四日～延徳四年二月八日　難波津泰諶聞書（宗祇より泰諶へ）講釈

延徳四年（一四九二）十月二十六日　延五記（堯恵より藤原憲輔へ）伝授

これを見ると、蓮心院殿説古今集註講釈などは本講釈と日時が重なっていることがわかる。一方、本講釈は何者によって行われたか、奥書を欠く零本であることもあって手がかりが少ないため、位置づけが難しい。

三　本講釈の講者と聴講者

本講釈が何者によるかの手がかりは次の一カ所しかない。

「世のうきめ」（955）の注に再度の講釈の際のものと思われる末尾の小字注として以下の記述がある。

盛郷各別ノ口伝カアルソ

これは、講者が盛郷なる人物であることを示唆するように思

われる（聴講者が盛郷である可能性もあるが、この点は後述する）。

それでは盛郷とは何人であろうか。和歌史上著名な人物ではない。

この盛郷は、細川氏の被官人で当時和歌や連歌の会にしばしば名が見える波々伯部盛郷（父祖不詳）のことであろう。稿者は波々伯部盛郷については特に知るところがないので、従来の研究を紹介することとする。盛郷は和歌の分野で井上宗雄氏、連歌の分野で鶴崎裕雄氏の著書に言及があるが、[3] 和歌史においても連歌史においてもさほど重要な存在ではないためか、まとまった記述はされていない。そのうち鶴崎氏は細川千句考察[4]（著書213頁以下）の中で、その連衆名を列記され、参加の年度を一覧し、注記を施されている。その連衆中に盛郷の名が見える。それによれば、盛郷は細川千句に文明十七年（一四八五）から永正三年（一五〇六）まで少なくとも十度に亘って加っていることが判明する。鶴崎氏の注記には次のようにある（著書256頁）。

盛郷　波々伯部兵庫、伯耆守、法名宗寅。―永正四年（一五〇七）八月細川澄之に殉死。新撰菟玖波集五句入集。

盛郷が伯耆守と称し、出家して宗寅と称したことは細川千句に見えている。『新撰菟玖波集』に「源盛郷」とあるのもこの盛郷である。盛郷が永正四年八月一日細川澄元との家督争いの合戦に敗れた細川澄之に殉死したことは、諸文献に見えており、『後鑑』当日条に諸史料が掲げられている。その内『瓦林政頼記』として、

瓦林政頼記云　波々伯部伯耆守入道宗寅心静ニカイシヤク申。遊初軒ニ火ヲカケ。腹ヲゾ切タリケル。其刻ニ一首詠ジテ。孫ノ児高雄ニ居タリケルニゾ使ハシケル。

永ヘテ思ハヾイトヾウカルベシ五世ノ果ノ近キ嬉シサ（新訂増補国史大系本）

とあって、澄之を介錯したことがわかり、辞世も残されている。また、『後鑑』所引文献以外、『実隆公記』同日条には、

抑細川九郎（澄之）於遊初軒自殺、波々伯部伯耆[5]入道六十三歳、同自害、

とあって、生年は文安二年（一四四五）と判明する。これにより本講釈の長享三年当時は四十五歳であったことになる。

次に、盛郷と和歌において関わりある著名人をあげると、正広（一四一二―九三）、栄雅（飛鳥井雅親、一四一六―九〇）、宗祇（一四二一―一五〇二）、冷泉為広（一四五〇―一五二六）

などをあげることが出来る。

まず正広の家集『松下集』に次のようにある。

延徳元十月一日、波波伯部兵庫助盛卿（ママ）所月次に、飛鳥井父子（栄雅・雅俊）、冷泉中納言（為広）、姉小路宰相（基綱）など出で給ひて、五十首中に

井水

村時雨いつふり分けし神無月今は井づつの水も氷りて（1490）

（下略）（新編国歌大観本）

これを見れば、本講釈と同時期に正広のほかに栄雅、雅俊、為広、基綱といった有力歌人との交渉や同座があったことがわかる。

また、井上氏著書には「波々伯部盛郷は長享元年（閏十一月二十八日、稿者注）江州御陣三十首和歌の作者となり（古文書集4）[6]、翌二年十一月（八日、稿者注）の湯山において宋世が勧進した大黒天法楽百首には上原豊前（賢家か）・波々伯部（盛郷か）寺井（賢仲か）等々が作者となっている（親長記）。」との指摘がある（室町前期296頁）。上原賢家は盛郷と同じく細川氏被官、米原正義氏に論文があるが[7]、文事の多い人物である。寺井賢仲は若狭武田氏の被官、これまた文事の多い人物とのことである。

なお、米原氏論文には「細川被官（上原・四宮・薬師寺中心）の京畿における文芸一覧」の表があり、そこに掲げられた会には盛郷も何度か加っている。例えば長享二年十月十六日宗祇庵での歌会、同年十二月二十二日宗祇庵での歌会、長享三年七月三日細川政国による詩歌会、同（延徳元）年九月二十七日上原賢家の夢想連歌会、同年十二月十九日政国の夢想熊野法楽歌会などである。なぜか本講釈と同時期のものが多い。

以上、従来指摘されている盛郷の文事をあげたが、それらと本講釈の年次は矛盾しない。

しかしながら、どのように結びつくかは、なかなか難しい。その点は章を改める。

四　本講釈の位置づけ

本講釈には数少ないが、「当流」との記述や、他流あるいは他者への言及がある。次のようなものである。

柏木殿・柏

「世中の」歌（954）注

柏木殿ケリヤウ梢ニ消ン共云ヘキ哥ト被仰イカ、、木葉トイヘハハカナイ所カ面白ソ（初度）

「あまひこの」歌（963）注

コレヲ柏ノヲトツレシトシヲニコリテアソハスイカ、（初度）

ヲトツレシトニコリテ柏木殿被仰タ、此方ハスムソ（再度）

柏木殿・二条家

「飛鳥河」歌（990）注

是ヲセニカハルト云ホトニ銭ニ立入テヨミタト柏木殿被仰、二条家ニハサナキト云（初度）

二条家

「ふたつなき」歌（881）注

新ハキコヘタレト二条家ニハ理ツメナトテ面白モナイト云哥ソ、コトヨク人ニ云テキカセヨトソ（初度）

一条殿

「恋しきか」歌（1024）注

一条殿ハカタハ方ニハ不被仰、カタチニ被仰タソ（再度）

常光ノ弟子

「おほあらきの」歌（892）注

ヲホフアラキノトス〔ム〕テヨムソ、ヲハラキ両説ソ、常光ノ弟子モ云カユルソ（初度）

当流

「□□（花の）色は」歌（450）注

サカリコケ是ヲ三ケノ内ニ入ル、人モアリケナ、当流ニハサハナイソ（初度）

他家・他リウ・当―

「誹諧哥」（1011ノ前）注

他家ノセツ、モノヨク云人アラヌ事ヲケウカリテ□□（面白カ）事ヲ云トソ、当―心ハ道ニアラスシテ道ヲヲシヘ非正道シテ正道ニス、ムトソ、正ノ字ヲサス事ハ雅ハ正也ト云、其ヨリ云ソ、他リウノセツノヤウニハナイソ（再度）

これらが誰を指すかは次のようになろう。

「柏木殿」は栄雅、「一条殿」は兼良であろう。「常光ノ弟子」は堯憲、堯恵あたりを念頭に置くか。但し、堯恵の『延五記』はまだ成立していない。

さて、これらを見て、他者への距離感を見ると、気づくことがある。まず、栄雅説を批判し、あるいは従っていない。栄雅の生前（栄雅は本講釈再度の年の十二月没）にこのような批判は注目に値する。

一方、当流が何かは明らかでない。二条家の名も見えており、二条家と当流を併用する言い方は宗祇も『古聞』などで用いている。但し、常光院流への言及（宗祇の立場からすると無視が普通か）や栄雅批判は宗祇らしくないとも言える。

先に盛郷の講釈ではないかと言っておきながら、宗祇講釈の可能性に言及するのは、矛盾であるが、「盛郷各別ノ口伝カアルソ」の文言をどう解するかに自信が持てないからである。つまり、これを講者である盛郷の発言ととるか、それとも聴講者盛郷が第三者にここに口伝があったと誇示しているのか、いずれか迷うからである。稿者自身は前者と解したいのであるが、かなり本格的で自信たっぷりな講釈ぶりは和歌史上無名に近い盛郷にふさわしくないとも思えるのである。

さりとて、何人か著名人の講釈とすればよいかというと、先ほどの栄雅説批判などがかえって障害となる。また、他にあまり類のないゾ体の古今集聞書も著名人の講釈とするに違和感がある。

そこでこの点は留保して、本講釈の内容を見ることにする。

まず、本講釈によく似た注は管見に入らない。『書目』で「難波津泰諶聞書関連」として『難波津泰諶聞書』の一種としたごときは論外であった。しかし、『難波津泰諶聞書』が宗祇の講釈であり、なにがしか本講釈に通うものがあったことは否めない。本講釈が宗祇系の注釈、あるいはその基になる『両度聞書』の影響を受けていることは比較すれば明らかである。とりあえず両度聞書と比較してみることとする。

本講釈の冒頭は左のようである。

一神無月しくれにぬるゝもみちは、只侘人の袂なりけり（840）
初冬ノ梢時雨ヲウチナカメテ居テ我ナミタモシクレニヲトラサリケリトヨメルソ、只侘人ノタモトナト云アタリ殊ニカンカアルソ
侘人ハ思ニアタリタ時ノ人時節ヲサシテミレハ一シホ面白ソ

『両度聞書』[8]にはこうある。

神無月しぐれにぬるゝ紅葉ばはたゞ侘人の袂なりけり
おもひのうちに、折しも神な月の時雨の木ずゑつくゞ〳〵とながめてかくいへるにや。「たゞわび人の」などいひたる、あ

はれふかゝるべし。

両書趣旨は同じであるが、行文はそれほど似ていない。これは他の宗祇系注釈もそれぞれ行文を異にするが、本講釈とあまり似ていないことは同様である。もう一首あげる。

一皆人は花の衣になりぬ也こけの袂よかはきたにせよ（847）

是ハ詞書ヲ以テ惣ノ理ハアラハレテアルソ、主ノ志モ皆アラハル、ソ、カハキタニセヨト云タトチメタカンソ、（卅六マテ宗貞ソ）

カウフリタマハル、大方ハ又位□ノ事ニイヘトコレハ官位ノ事、キツクイハヌカヨキソ

『両度聞書』はこうである。

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかはきだにせよ

こと書に明也。猶「かはきだにせよ」といへる、あはれふかくや。こと書にことはり至極せり。可思之。

類似は明らかである。『両度聞書』に「あはれふかくや。」とあるのが「タカンソ（「多感ゾ」であろう）」とあるのがいかにも本講釈らしいところである。惣じて本講釈は『両度聞書』より丁寧な説明ぶりである。『古聞』も量が多いが、『古聞』が詳細なら本講釈は懇切という感じがする。あるいは初心者向けなのかもしれない。

『両度聞書』と酷似している場合もある。

一世の中はなにかつねなるあすか川きのふのふちそけふはせになる（933）

アスカ河ノフチセノカハルヲ見テ世ノ中ハイツレノ事イカナルワサカツネナラムト思トル心ソ

『両度聞書』はこのようである。

世中はなにかつねなるあすか川昨日の渕ぞ今日は瀬になる

飛鳥川のかはる渕瀬をみて、世中にいづれの事、いかなるわざか常ならむと思ひとる心也。

全体に本講釈は後になるに従って、『両度聞書』や宗祇系注釈との類似が目立つようである。もう少しあげてみる。

一いつしかとまたく心をはきにあけて天のかはらをけふやわたらん（1014）

マタク心ハ待心ト云ヲ足ヲハタクル心ニトリテハキニアケテハカリアケテ必アスノ夜アハン物ヲモタヘテカリアケテワタルソ、是ヲ人ノ短慮ノ事ニトルソ、一定ナラン事ヲ如此スレハナルヘキ事カナラヌ、ソレニコレヲトルソ、堪忍セテ不叶事ヲシラセン為ソ

急ニ進ナラムトスレハ不達ノ心ソ

『両度聞書』はこのようである。

いつしかとまたぐ心をはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらむ

是は、あすあはん事を猶いそぎて、はぎをかきあげて天河をさしまたぎ〳〵けふやわたらむといへり。猶、待心急にして、けふよりわたるよし也。下心、成就すべき事の一定あるを、猶短慮にして功なるべき時をまたずしていそぐ物はかならず不慮の事も出来やぶるゝ事侍也。欲速則不達之心也。もし又事なるべき事のおぼつかなく遠からむは、いとゞ心をのどめてゆるゝかに待べき也。いづれ短慮の道にたがふ事ををしへいふなり。

但し、両者が軌を一にするばかりかというと必ずしもそうではない。このような例がある。

一あなうめにつねなるへくも見えぬかなこひしかるへきかはにほひつゝ（426）

是ハ花ナトノ其跡ニ後ニワスレマシキナト云タヤウナ心ソ、アナウメニト目ヲキルソ、後ニ此匂ヲ思出スル心ソ、裏―人ノミメ形ナトハヨキ様ナカ実ナ所カナイヲ歎ソ、我モ形ハカリソ、心ヲ常住ニ可持事ソ、人モ又サヤウノ所ヲ見テトンスマシキ事ソ

アナウトキリテ又目ニトソ

『両度聞書』はこうである。

あなうめにつねなるべくもみえぬかな恋しかるべき香は匂ひつゝ

「あなう」とは、観ずる心也。「あなう」ときりて「めに」と又切て心うべし。「香はにほひつゝ」は、花などの匂の忘がたき様の事也。下心、「つねなるべくもみえぬ」といふは無明に対する法性也。万物法性には侍れど、又実に其とはなし。「香はにほひつゝ」は法性の用也。「恋しかるべき」は法性のことはり也。されども、無明・法性共につゐにまことなし。法性は常住に無明は変化す。法性は香はしく、無明はかなしき者也。「あなうめに」とは、目前の無明のつねならぬ事也。二に成時は、かなしくも香はしくもおもはるゝ也。一如にみれば法性も又常なるべくもみえぬ儀也。

本講釈の「裏―」と両度聞書の「下心」の説明が明らかに異なっている。[9] 他の宗祇系注釈は概ね両度聞書に一致している。こうして、本講釈は宗祇の講釈に大きな影響を受けていることは確実であるが、宗祇自身の講釈とするには疑問もあると言える。その一方、これまで見てきた類似を考えるなら、宗祇以外の何人かが盛郷に行った講釈という可能性はほとんどないとも言える。

そこで、仮に宗祇の講釈として宗祇の動静と本講釈の日程とが矛盾しないかを考えてみる。

一番問題になるのは初度の講釈の日程である。初度の講釈は長享三年三月二十一日に巻十を終えたと考えられるが、引き続き巻二十と仮名序の講釈が行われたはずである。

ところが、宗祇はこの前後例によって多忙であるが、『実隆公記』によれば三日、二十日、二十四日、二十八日と度々実隆邸を訪れたほか、五日には種玉庵で歌会を催している。このうち三日には「古今集序聞書幷三ケ事内切帋」「短哥事切帋」を持参して伝授し、二十四日には詠歌大概を講じ、実隆より中国（大内家）下向の餞別をもらい、二十八日には請暇の挨拶に訪れている。中国下向は翌二十九日であった。その他『実隆公記』に見えない行動もある。[10]

この日程で、本講釈が可能か否かは微妙であろう。さらに、三月二十二日以降、巻二十と仮名序の講釈が可能かどうかも問題である。もちろん講釈は中断してもよく、九月十七日に帰京して以後再開してもよいのであるが、いかがであろうか（再度が行われていることから、初度は中断したとしても、中絶はし

ていないはずである）。

一方、再度の講釈については特に抵触するほどの事実は知られていない。

以上決定的な証拠はないのであるが、宗祇の講釈とするには問題が多いことも事実である。

それでは盛郷の講釈とするとどうであろうか。これも問題が多い。

まず、盛郷のような和歌史上無名な人物に本書のような講釈が可能かどうかが疑問である。さらに先に述べたように本講釈は有力歌人の説を批判しており、大胆すぎる。誰に講釈したかも問題である。以上どれをとっても重大な障害と考える。

しかし、あえて可能性を言えば次のようになろう。

本講釈が宗祇の講釈の影響を強く受けていることから考えれば、本書の講者が宗祇本人でないならば、宗祇の講釈を受けた人物であることは確実である。仮に盛郷が宗祇の講釈を受けていれば、それを基にしてあるいは可能かもしれない。また、栄雅説批判も宗祇の内々の講釈をそのまま反映したものかもしれない。その場合、盛郷の受けた宗祇の講釈が、正式のものではなく、何人かの聴講に同席した、つまり同聴であって、宗祇の認可を受けていない性格のものという見方も出来よう。また、講釈の対象も盛郷の身内なら、僭上との批判もされないであろう。

右は余りにもほしいままな憶測であるが、一説として提示しておく。

なお、本書と何らかの関係を有する事実が、井上宗雄氏によって指摘されている[11]。それは『実隆公記』の次の記述である。

『実隆公記』大永五年（一五二五）十月二日条

（前略）波兵（波々伯部正盛）（波々伯部兵庫助の意、稿者注）食籠（中略）進之、彼祖父古今聞書許拝見、同文字読可相伝之由也、題号・和哥一首令読聞之、聞書二冊・定家卿自筆古今本等持来、留本、聞書先返之、二献盃酌、

この記事について井上氏は次のように述べられている。

細川被官では、波々伯部兵庫助正盛が数寄者で、しばしば実隆を訪い、大永五年十月二日祖父（盛郷？）の古今聞書を見せて文字読の相伝を請い、実隆も題号・和歌一首を読み聞かせ、かつ聞書・定家筆古今集を借りた。

波々伯部兵庫助正盛が盛郷の何に当るかは明らかでないようであるが、井上氏の推定の通り正盛の祖父というのが盛郷のことであれば[12]、この古今集聞書は盛郷が宗祇から受けた聞書の可

能性が高い。当然のことながら、本書がそれであるとして、本書はやはり宗祇の講釈とする見方も出来よう。一方、その盛郷の聞書を基に盛郷が行った講釈の聞書が本書とも言えよう。いずれも難点があり、決めがたいことは既に述べた。

以上様々な憶説を重ねたが、確たる結論は出ない。後考を俟ちたい。

五　ゾ体の抄物としての本書

本書が注目されるべき点の一つは、ゾ体であることである。古今集の聞書、注釈書は数多いが、ゾ体のものは珍しく、ほとんど例を見ない。また、古今集以外でも、いわゆる和文の作品ではほとんど見かけない。[13] 仮名抄という分類からすれば、ゾ体の仮名抄ということになろう。稿者はこの問題について全く不案内で語る資格がないので、専家の見解を紹介するに止め、古今集注釈書を見てきた立場から、なにがしか感想めいたものを述べてみたい。左に引用するのは、柳田征司氏の見解である。[14]

講師の言葉と無関係に聞書が書かれることもあり得ないし、聞書者の言葉が全く関与することがないということもあり得ないであろう。しかし、実際の抄物についてどこが講師の言葉でどこが聞書者の言葉であるのかを明らかにすることはむずかしい。抄物に特徴的な文末の「ゾ」さえ、なんとなく講師の話し言葉と受け取られて来たように思われるけれども、これが講師の用いた言葉なのか聞き書き者が選んだ文体の言葉なのかということも実は明らかでない。（25頁）

以上要するに、抄物の「ゾ」は、室町時代の口語であり、それと同時に一方で伝統的な漢文訓読の用法をも残存させていたということになる。清原宣賢は、短い傍注や上欄外注に稀に「ゾ」を用いることがあったけれども、一般には講義を行う場合も自ら抄する場合も文語「ナリ」を用い、これに対して五山僧とその学統下にある人達の多くは口語「ゾ」を用いた、ということになる。（52頁）

抄物の文章は、桃源の（史記抄の、稿者補）聞書部分のように、講師の言葉にかなり近い形で記録することからはじまったのであろう。その文章は短い文がぶつぶつと切れる形で続いており、『史記』原典本文と対応させながら読んでも表現力に欠けていた。しかし、このような形ではじ

まった口語体でゾ体の文体をもとに、自らが注釈する場合にもこれを用いることによって口語文体を練り上げていったのが抄物の口語文体なのであろう。（57頁）

つまり、本来抄物は漢籍もしくは漢文体の原典の注釈に発するものであり、最初は原典を訓読し、漢文の注を付す形で始まったのであろう。それが講義をより反映する形で（一方では伝統的な漢文訓読の用法にも影響を受け）、仮名交り文で書くようになり、五山僧とその学統下にある人達の多くが口語「ゾ」による仮名文体を用いて練り上げたのであろう。なお、仮名抄の発生時期は早くて鎌倉末とされる。

この見解を本書のような古今集聞書に適用するとどうなるであろうか。

まず、漢籍や仏典と異なり、古今集などの和文の国書には当然のことながら古いものでは平安期から和文の注釈がある。それらは和漢混淆文以前の文体であり、いかなる文体を用いるかの問題はほとんど存在しない。先に比較のために引用した『両度聞書』のような文体が当然である。但し、そこには素人目にも室町期を感じさせる言い回しがないわけではない。例えば注（8）に言及した「裏の説（リノセツ）」という言い方はやはり中世を感じさせる。古い言い方なら「下の心」であろう。また、全体としてもそれ以前の和文脈と異なる雰囲気も感じられる。しかしながら、本書のゾ体はそれと同様には扱えない。本書のようにゾ体が選ばれるには何らかの特別の事情があったと思わなければならないと考える。ところがその事情について今考えることができない。

その点について一つ手がかりとなるのが柳田氏がゾ体について「五山僧とその学統下にある人達」が用いると言われたことである。先に述べたように本書は講者か聴講者のいずれかが波々伯部盛郷であると考えられるので、もう一方が「五山僧とその学統下にある人達」ではないかと考えるのである。しかしながら、本書の成立事情が今ひとつ明らかでないため、この点について満足な考察をなしえない。

ただ、この時代武士と五山僧との交流は広く行われており、一部の限られた人々だけではない。波々伯部盛郷と同じ細川氏の被官人で、文事に熱心だった四宮長能（生年不詳―一五〇四）には月舟寿桂との親交が指摘されており、[15] 盛郷にも同様に五山僧との関わりが想定されても不思議ではない。このことを直ちに本書がゾ体であることに結びつけるのはあまりに短絡的であ

るが、一応課題として考慮に入れておいてもよいであろう。

いずれにしろ本書のゾ体は当時の他の古今集聞書中異色のものであることは間違いない。

六　まとめ

以上不明な点が多いが、ここまでのまとめをすると次のようになる。

一、本講釈は初度が長享三年（一四八九）三月十一日から二十一日まで、再度が翌延徳二年十月二十六日から十一月十日まで行われたものであり（いずれも現存記載部分）、それを含む古今集すべての講釈が行われたと考えられる。

二、本書は初度の講釈の聞書を整理し書直したものに、再度の講釈を小字で書入れた原本である。

三、本講釈は細川氏（政元）の被官人波々伯部盛郷（一四四五―一五〇七、当時四五―四六歳）が講者か聴講者として関わったと考えられるが、いずれであるかは断定できない（前者ではないかとも思われる。その場合は内輪の講釈であったと思われる）。

四、本講釈は宗祇の講釈の影響を強く受けており、宗祇の講釈を聴講した経験がある人物による講釈と考えられる（宗祇自身の講釈の可能性も考えられるが、日程的及び内容的に問題がある）。

五、古今集の聞書としてはきわめて珍しいゾ体であるが、五山僧の関わりの有無を含めてその背景は不明である。

〔注〕

（1）慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』（平19刊、以下『書目』とする）において「難波津泰諶聞書関連」（282頁）とした書。ただし、この分類及び備考の記述は当時の川上の判断であるが、後述するように誤りである。

（2）従って、『書目』において「延徳二、三年の聞書」としたのは誤り。川上・佐々木孝浩・伊倉史人・山本令子・石神秀美共編「古今和歌集注釈書・伝授書年表（稿）」（「斯道文庫論集」47平25・2）では本稿のように訂正した。但し、再度の開始（現存部分）を延徳二年年十月二十七日に

したのは、二十六日の日付が推読であるためである。
なお、初度と再度の講釈が時日を経て行われた例として、宗祇から肖柏に行われた『古聞』がある。初度は文明十三年（一四八一）から翌年にかけて行われ、再度は延徳二年（一四九〇）におこなわれ、この間八年ほど間隔がある。

（3）井上氏『中世歌壇史の研究　室町前期』（昭36刊、改訂新版昭59刊）、『同　室町後期』（昭47刊、改訂新版昭62刊）、鶴崎氏『戦国の権力と寄合の文芸』（昭63刊）。

（4）「細川千句とは一五世紀前半（文安以前）～一六世紀後半（永禄以後）の管領細川氏による毎年二月二五日北野天満宮奉納の聖廟千句。」で、京大菊亭文庫本によりそのうち文明十七年から永正四年までの内容が判明する。それにより「〔細川〕政元時代の細川千句は、天神忌の二月二五日、細川氏一族や細川氏の有力被官が五座に分かれ、各二つの百韻を詠み、管領家の御前御座敷の第一の発句は室町将軍の詠句であったことなどがわかる。」とされる（『俳文学大辞典』平7刊、鶴崎氏執筆）。

（5）続群書類従刊行会本では「伯庵」とあるが、東京大学史料編纂所所蔵史料目録データベース画像により改めた。

（6）国立公文書館内閣文庫蔵「〔蜷川家古文書〕」（古一六―二九五）第四冊のこと。「江州御陣三十首和歌」は『大日本史料』第八編之二十一に翻刻がある。

（7）米原氏「細川被官人の文芸―上原・四宮・薬師寺を中心として―」（「国史学」104昭53・1）。

（8）片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』三（昭56刊）所収宮内庁書陵部蔵近衛尚通本翻刻による。

（9）宗祇の講釈には「下の心」、「裏の説」「理の説」（いずれも「リノセツ」と読む）とする説明が多用されるが、本講釈も同様である。

（10）宗祇の動静については、島津忠夫氏『連歌師宗祇』（平3刊）巻末の「宗祇略年譜」他を参照した。

（11）井上氏『中世歌壇史の研究　室町後期』265頁。

（12）正盛は細川高国に従い、享禄四年（一五三一）六月四日高国方の丹波守護代内藤国貞に従って摂津天王寺の戦いに出陣、敗死した（享年不詳、細川両家記）。

（13）『太平記鈔』など絶無ではない。

（14）柳田征司氏『日本語の歴史4　抄物、広大な沃野』（平25刊）。

(15) 注(7)米原氏論文及び乾克己氏『中世歌謡の世界』(平4刊)第一編第四章「中世武家社会における宴曲の流伝について」(礎稿は乾氏「宴曲の伝流と武士—金山氏・四宮氏を中心として—」「國學院雑誌」昭49・6)。ちなみに長能も戦いに敗れて自害している。

〔翻刻〕

凡　例

一、以下は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『古今和歌集〔注〕』零本（函架番号〇九一―ト一七八）の翻刻である。

一、漢字、片仮名、平仮名の区別は原本に従った。その際、漢字、仮名ともに原則として通行の字体に改めたが、一部旧字体、異体字を残した場合もある。

一、翻読の便宜のために私に読点を付した。

一、まれに濁点があるのは、原本に濁点表示があるものである（濁声点は濁点として表示した）。

一、原本の書写形態にかかわらず、二度にわたる講釈を次のように区別して翻刻した。

　初度の講釈の注文は和歌の歌頭（一ツ書より一字下げ）にそろえて掲げた。

　再度の講釈の注文は頭注のものは初度の注文の後に改行して歌頭より一字下げで、また、初度の注文の後に小字で書き入れられているものは初度の注文の後直ちに括弧（　）内に、傍書あるいは補入の形で書入れられているものは初度の注文の該当箇所付近に本行で括弧（　）を付して掲げた。最後の場合、前後文意がそのまま通じるとは限らない。

一、抹消された字句の多くは単純な書き誤りと認められるので、削除に従った。

一、各丁表裏の代り目を原本の本行によって」で示した（丁数、表裏は示さない）。前項のように、本行、頭注の順に翻刻しているため、頭注の翻刻は」の代り目に従わない場合がある。

一、破損、汚損などにより判読不能箇所は□で示した。その際、字数をおおまかに□□□などとして示した。長文にわたる場合は（コノ間欠）（以下欠）とした場合もある。難読箇所もこれに準ずる。

一、推読した場合は〔　〕を付したが、本書は判読困難箇所が多いため、推読した箇所が通常の翻刻より多い。従って、〔　〕は最小限しか付していない。

一、原本にある中略記号は……あるいは――で示した。

一、和歌の末尾に括弧（　）を付して新編国歌大観番号を示した。

（前欠）

一神無月しくれにぬるゝもみちはゝ只侘人の袂なりけり（840）

初冬ノ梢時雨ヲウチナカメテ居テ我ナミタモシクレニヲトラサリケリトヨメルソ、只侘人ノタモトナト云アタリ殊ニカンカアルソ

侘人ハ思ニアタリタ時ノ人時節ヲサシテミレハ一シホ面白ソ

一藤衣はつる〻いとはわひ人の涙の玉のをとそなりける（841）

ハツル〻糸ハモニアタテ愁ノ甚時ヨメル哥ソ、玉ノヲ命トハミマシキソ、玉ヲツラヌク糸ノヤウニトナリタソ

父カト云カ面白、昔ハ三年トモヲ云ホトニ

一朝露のおくての山田かりそめにうき世中を思ぬる哉（842）

コレハ色〻面白（心）ソ、詞書ニ引カケテヲクテノ山田ノ何トナウ面白ヲ見テヨメルカ、田ト云モノハ春タネヲ〻ロスヨリ造作シテ秋ノ田トナレルモノソ、人モ又種子ヲウケテヨリツヰカキリアル事ノ躰ソ、久シキモノモ又（サン時ノ）アサ露ノハカナキモ只同事ソトクハンシテヨメルソ、今ハキハノ所ハ同心ソトヨメルソ

思ノ内山寺へ行タソ

一墨染の君か袂は雲なれやたえすなみたの雨とのみふる（843）」

スミソメノキミカタモトハ服ニアタリタル人ノ事ソ、我ナミタモ服衣ノ袖ヲ見レハ（其人□□ニ被為ミル□□ヘソ）タレモナミタカタヘスコホル〻、其コホル〻キハ此袖ヲ見レハコホル〻程ニ雲ナレヤソ

一足引の山辺に今はすみ染の衣の袖のひる時もなし（844）

コレカ女ノ哥ニテ殊ニ面白ソ、女ノ身トシテ都ヲ立出山里ニスマハ只ナリ共カナシカラムスルニシテモニアタリテ山寺ナトニアラハサモコソアラメコトニアシ引トヲクカム肝心ソ、アシ引トイヘハ山モ大ニ深クナルソトソ

コレモ哀ナ哥ト定哥ソ

一水の面にしつく花の色さやかにも君か御かけのおもほゆる哉（845）

諒闇ノ年ト云ハ何ノ時テアラムスルソ、嵯峨カシユム私カ計難（事）ソ、池ノホリニ如此花ノチリタルヲ君ノ御カケニタトヘタカ面白ソ、シツクハ御抄ニ色〻カケタソ、其上ニテキコヘサルソ、ケリヤウシツムト思ヘハ又ウカムト云心カ、ヒツキヤウ（落花ヲ水ノ上ニアルカト云レハシツムヤウナ□レヲ）一天ノ君モ如此御ナリアリタレハアトモナイモノト思ヘハ消ルヤウニ又思出レハレウカムヲハイスルヤウナホトニ池ノ」花ヲ以タトヘテ云ソ、サマコケテ面白ソ

深草ノ御門ノ御時テモアルヘキカトソ

一草深き霞の谷にかけかくしてる日のくれし今日にやはあらぬ（846）

御国忌ヲコキト云ハアシキソ、霞ノ谷ハ深草ヲ以ハヨメ共霞ノ谷トイヘハ尚深キ心カアルソ、一天四海クラヤミノ心カアルソ、崩御ノ事ヲハ昇霞トイヘハソ、テル日ノクレシハ其日ノ事ト云ニテアレト又今日テハナイカ、皆是ヲシレト云心一又一ニハ今日テイカ、ナイソ、セメテ別ヲ近クナシテモ崩御ノ日ニナシタイトソ、此作者ノ哥ニ心モ深キ哥ソ

草深キハ深草ノ事、霞谷ハ天子ノサウヲ昇霞トイヘハ今日ヤハアラニ、二ノ心カアルソ、今日ニヤハタレモ歎キヲモハヌカト云一、又一ノキ、今日ハ御コキノ日ニアヒアタリハシタレトハヤ年ヘタホトニクレタシ、ソノ日テイカ、アラヌソ、サアラハ御別モチカ、ランスルヲトソ

一皆人は花の衣になりぬ也こけの袂よかはきたにせよ（847）

是ハ詞書ヲ以テ惣ノ理ハアラハレテアルソ、主ノ志モ皆アラハル、ソ、カハキタニセヨト云タトチメタカンソ、（卅六マテ宗貞ソ）

カウフリタマハル、大方ハ又位□ノ事ニイヘトコレハ官位ノ事、キツクイハヌカヨキソ

一うちつけにさひしくもあるかもみちはも主無宿は色なかりけり（848）」

此ヤウナ哥ハヤス〳〵トシテヤウモナイカ、詞書ヲヨク見テトヲル君ノ事ヲヨク思入テ見ヨ、此哥ニハカキルヘカラサルソ、近院ハ春日烏丸ソ

カハ哉ソ

一ほと、きすけさなく声に驚けは君にわかれし時にそ有ける（849）

（此詞書ヲ見ルニ）タカツネヲハ作者ツヨク切ニシタ人ソ、タカツネハ夏ウセタ人ソ、何トナウホト、キスノ一声ニ催レテ其ナキ人モ此比ニテアルヨナト思所カ切ナソ、其別シ比時鳥モナキシモノヲトソ

ワスレヌトイヘトウキ世ノ事ニモヨヲサレテ思タユム折節驚カサレタト也、哀ナソ、□□□事如此ソ

一花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきに恋んとか見し（850）

大方人ノ花ヲウフルハ世〻ノ春ヲカケテナカメントウフルニハレナソ、ウセタカ思カケヌ事ニテアル程ニ其ウヘシ時ハ何

共ソコヲ思ハサリシホトニ如此ソ
ソノウヘシ時ハ花ヨリサキニ人ヲ恋ン共又何共ヲモハサリシヲトソ
一色もかも昔のこさに匂へ共うへけん人のかけそ恋しき（851）
ウヘケン人ノ（カケハ）ナキカケソ、恋シキソ」
一君まさて煙たえにししほかまの浦さひしくも見えわたる哉（852）
是ハ哀ハ詞書ニ見ヘタソ、此君ノ名誉ノ内塩カマヲウツスカ第一ニテアルニアレタルヲ見レハウラサヒシクハ何トナウサヒシクソ、又浦ノ躰モサヒシキソ
トヲルノ一期ノ躰コヽテ見ヘタソ、ウラサヒシクハウラテハアレト何トナウサヒシキトソ
一君かうへし一村すゝき虫のねのしけき野へ共なりにける哉（853）
此注ハ詞書ニ見ヘタソ、シケキ野へ共ナリニケル哉ト云所ニ誠ニ荒タル躰カ深ソ、此哥ノ詮ソ、詞書ニハヤクソコニハモトワカソコトキテアリツルソ
有助ハ貞国ノ兄ソ、義カトノ子ソ、ナリニケル哉ニ深ソ、カウモナリニケル哉ソ
一事ならは事の葉さへもきえなゝむ見れはなみたの滝まさりけり（854）
アリツネハ惟喬ノヲチニテアリタホトニ如此ナラハ言ノ葉モ消失ヨカシ、其人ノアトニアリテナミタヲモヨヲスハトソ
此父ハ友則カ父ソ、友則ノ親有常ソ、□□□□ソ
一なき人の宿にかよはゝほとゝきすかけてねにのみなくとつけなん（855）
此宿ニカヨハヽトハウセタル人ノ宿ノ事ソ、カケテノミハタヨリナイ宿ノカナシミノナミタトヲカケテソ、ホトヽキスハシテノ山□鳥ナレハツネニナクト」ツケヨト也、宿トハ其人ノモトニトソ
ナキ人ノ宿ハ本宅ソ、トテモナカハ我思ヲツケヨ
一たれ見よと花さけるらん白雲のたつのとはやくなりにし物を（856）
此白雲ノ立野ハ葬ノ煙ニモチトハカヨウヘキソ、サレトナキ人ノアトニサクラナトサイテアルヲ見テミルヘキ人モナイニトワヒテ其里ノアレテ雲タツハカリノ野トナリタト云カヨキソトソ
此ハサルヘキ人ノアトニミル人モナキ花ノサイタ時ヨミタ哥ソ、□□□アラヌサマナ□□ツヨクイハン為ニ□□□ルソ

一かす〳〵に我をわすれぬ物ならは山の霞を哀とそ見よ（ママ）（857）

閑院ハ王ノ事ソ、カス〳〵ニ我ヲワスレヌハ何事ニツケテモソ、山ノ霞ハサウノケフリノコトソ、（心ヲ以平世ノ山ノ霞□）又霞ヲ見ヨハ此五ノ御子平世ハレヌ思ノアリケルヲ其思ヲミヨトカトソ、（万ニハレセヌ事カ有タヲ其ヲ霞ニタトヘテヨメタカトソ）

閑院ノ五御子ケツシタキ事ソ

一声をたにきかてわかる、玉よりもなきとこにねん君そかなしき（858）

声ヲタニキカヌハアヒヘタ、リテアルホトニコレコソカナシカルヘキニナキアトマテ深チキリヲ切ニ思タ心カアルユヘ帰リ来テ独ネント云」タカ哀ナソ、今一重アルソ

一もみち葉を風にまかせて見るよりもはかなき物は命成けり（859）

風ニチル紅葉ハ（カキリ）時至ル物ニテアルニ我身ヲタトヘテミレハ猶ハカナキ我身ソトソ

一露をなとあたなる物とおもひけん我身も草にをかぬ斗を（860）

義ナシ、哀ナソ

一つゐに行道とはかねてき、しかと昨日今日とはおもはさりしを（861）

キノフマテハ今日トハ思ハサリシト云セツ不用、只スクニイヘハ哀カ深キソ

ナリ平辞世マテ心ハアマリアリテナト云カアシキソ

一かりそめの行かひちとそ思こし今はかきりのかとて成けり（862）

行カヒチハ行カウ道ト云心、悉皆詞書ヲ哥ニ引入テ吟シテミタレハヨウ胸中ニウカフヤウナソ、母ニ見セヨト云タカ孝行モアリ哀モ深キソ

□□□カ哀ナソ、滋春モタツキナキモノテソ□□ツラン」

同三年三十一辰

古今和哥集巻第十七

延徳二〔十廿〕六

雑哥上　サツカト云ソ

一我上に露そをくなる天川とわたる船のかいのしつくか（863）

此哥万葉ニ此夕（ユフヘ）フリクル雨ハヒコホシノトワタルフネノカイノチルカモノ類ソ、サツカト云哥ハ四季サマ〳〵ヲ交タ心ソ、サルホトニ後々ノ集ニハ春カラソタツル、此集ハサハナイソ、露ソヲクナルハタトヘハメクミノ露ニテモ思ノ露ニテモ後ニ可申ソ、マツメクミノ露ニシテモ思ノ外ニカ、リタホトニ天

川ノカイノシツクニテモヤアルラン、大方ノ露ノヤウニテモ
ナイホトニ如此云ソ、更ニ大方ノ露ニテハナイホトニ天川ノ
カイノシツクカト云、此哥ハ人ノシラ□サテナ事カアルソ、
後ニ可云ソト口伝
□□□不慮ノ思ノ露カカ、リタホトニ天ノ河ヲワタルフネ
ノカイノシツクカト云、社ノ神ニカリノナミタヤノ類ソ、
タ、キイナ露マテソ、サツカノ第一ニヲケタ心有ヘキ事ソ
一おもふとちまとひせる夜はからにしきた、まくおしき物にそ
有ける（864）」
月ノ下花ノモトニテモアレ朋友ウチトケタ時ノ事ソ、カラ錦
ハタ、マク云ン為、義ナシ
何トナウ昔ヒタコケタ哥ソ
一うれしきを何につ、まむから衣袂ゆたかにたてといはましを
（865）
義ハナシ、タモトニ物ヲツ、ムト云事ハアル事ハ心ト云事、
又忝ト云事、ツ、ミアマルト云事ソ
ヨロコハシキ事ノアル時ヨメル哥、下句タモトユタカナト
□ラウシイソ
一限なき君か為にとおる花はときしもわかぬ物にそ有ける（866）
此哥イセ物語テナリ平作枝ニ鳥ヲ付タト云、平ノ哥ナレト五
文字ニナヲリテ入ソ、コ、テハキシヲ立入タ、ツクリ花ト云
コトモナシ、只君カ為ニト折タレハ此花カ常住ナト云心誠ニ
物〳〵シキ哥也
マウチキミ忠仁公ソ、ヲウキ大キマウチ君トアルヘキヲ略
シタソ、イカ、マキル、ヤ、此集ニテハ忠仁公ト云ソ、君
ヲ祝心ニテモ如此花カ常住ナ共ヨムヘキソ
一紫の一もとゆへにむさしの、草はみなからあはれとそおもふ（ママ）
（867）
是ヲハ恋ノ哥ソ、ムラサキヲハ女ニタトヘタソ、此野ニムラ
サキヲヨミツクルソ、一本ユヘニハ思人ヒトリニヨリソノユ
カリ悉愛用シタトソ
武蔵ノ、事、裏ノセツハ愛ニハウシテ如此アルヘキヲイサ
メノ哥ソ
一むらさきの色こきときは目もはるに野なる草木そ別さりける
（868）」
女ノイモウトナトヲ弟トカクソ、サヤウニモ云ヘキ、ナリ平
ノイモウトノ男マツシキ事イセ物語ニ見ヘタソ、色コキハ寵
愛ノ時ハ其野ニ分別ノナイトソ、同野ノ哥ト同物ソ、裏、愛

ニハウシテ其ユカリヲ皆愛スル事亡国ノ基トソ、玄宗ヲ引ソ、ヤウ氏ノ事ヲ

ナリ平ノツマノイモウトノヲトヘソ、前哥同心ソ

一色なしと人やみるらむ昔よりふかき心にそめてし物を（869）

ソメヌ衣ナ程ニ色ナシトソ、人ハ中納言ノ事ソ、昔ヨリ我ハワレノ御事ヲハ深ク思申物ヲトソ

国経ノ思色ナシトヤミルラントソ、我ハ昔ヨリ深思トソ、

此近院ハ文徳ノ御子能有

一日のひかりやふしわかねはいその神ふりにしさとに花もさきけり（870）

ナム松ハ実名浪松ソ、五位ニナサレケレハソ、ヤフシワカネハ、日月ハ一人ノ為ニソノ光ヲクラマサネハト云心、花モサキケリハ栄花ノ事ソ

アルセツ、ナンハ成松ト云ト云セツイカ、、メクミノ人ヲワカヌ心、花モサキケリハ栄花ノ事ソ

一大原やをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいつらめ（871）

貞観十一ヨリ後女御参詣ニテアルヘキソ、（東宮ニ御立有タソ、其一二年ノ事ニテソアルラン、此東宮ハ陽成ノ御事ソ）大ハラハカスカニテ御入アルホトニ御マイリアリタルソ、神代ト云ハ天照大神天児屋命ト君臣合躰ノ」神ソ、其ニ君ハ日神ノ御末又女御ハコヤネノ尊トノ末、然ニ今合躰シテマウケマイラセラレタレハト云心ソ、物語ニハ恋ノ心コ、テハサモナイソ、山ハ只明神ノ御事ソ

モノカタリハ恋ノ心カアレトコレハサハナキソ、天ノコヤネノ尊ト大ヒルメノ尊ト此二神君臣トナリ給フ所ヲヨメルソ

一天つ風雲のかよひちふきとちよをとめの姿しはしとゝめむ（872）

良岑ノ宗貞共(ママ)偏昭共入ソ、若コレハムネ定ト入タニアフタカ、又俗ニテモヨメルカ、五節ノ事天武天皇大友ノ皇子ニヲソハレテ吉野ニ御入アル時袖フル山テ琴ヲ弾シ給フ時天人下テ袖ヲ五〔返〕カヘセシヲ模スル事ニテアルホトニ今モ此マイカ面白ホトニ乙女ヲカヘサシト云ソ、ヘンセウノ哥ニハ心詞相対ノ哥ト云ソ、元来又スカタハ得タヨミテソ

宗貞ト俗名ニテ入ル、ハニヤウタホトニカ、但又正トク俗ノ時カトソ、今ノ五節ノ乙女ヲモ天人ニナソラヘテヨメルソ、□カソ

一ぬしやたれとへと白玉いはなくにさらはなへてや哀とおもはむ（873）

カムサシノカサリノ□□□□〔チ〕タルヲ（シ□□ニヲチタソ）トヘトイハヌ」ホトニタカニテモコソ〔ア〕ルラメトサラハナヘテアハレト思ントソ、カ、リノ大ナ哥ソ

一玉たれのこかめやいつらこよろきのいその浪分おきにいてにけり（874）

此蔵人ハ女蔵人ニテソアリケム、哥ノ心ハタマタレノコカメト云事人シリカタキ事ソ、（御抄ニ色々イヘト未決）風俗ノ哥ニ、アルシハコ、ニ――――御抄ニ心得ヌ事ト云テ（ママ）ヲキ、コカメトテ御笑候ハトソ申、既ニキサイノ宮ノ御前ヘマイリテヲキニ出テ候物ヲトソ、玉タレノコカメト云事ハ風俗ノ哥ニ（玉タレノコカメト云ヨリヨメル哥也、コレ口伝ソ）ヲヨ（ママ）メルソ、ナレハ口伝ソ

鈎（コ）ト云ン為ト俊成ノイヘトハウホツソ、女蔵人共御ワラヒアレト、トリヤ、御笑アレトヲキニ出タトソ、キサイノ宮ノ御前ヘノ事ソ

一かたちこそみ山かくれのくち木なれ心は花になさはなりなん（875）

比興ノ法師ニテソアルラン、哥ハ義ナシ、サレテコソヨメルラムトソ、誠ノ心カアルヘキソ

一せみのはのよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひぬるかな（876）

夜ノ衣ハウスケレトウツリ香コクモト云タハ」何トソ、ナレト方タカヘノ一夜ノ事ハアサキト云ン為ニセミノ羽ノトソ、然ヲ亭主ノ懇ナホトニウツリカコクモソ、如此イハネハ意得カタキソ

上句（カミノ）、此キヌノウスイトハイハヌハナサケカコクニホウタトソ

一をそくいつる月にも有哉足引の山のあなたも惜へら也（877）

月ヲ遅ク思テイラツセイカラ如此ヨメルソ

我月ヲ待カ切ニヨ〔テ〕山ノアナタノ人ノ心ヲサツシタリ

一我心なくさめかねつさらしなやをは捨山にてる月を見て（878）

ヲハ捨山ノ根元ニ老タルヲハヌステアル（ママ）時如此ヨム共大和物語ニモ云カ、作物語ノ雑セツソ、只此山ノケシキヲ見ルニ所カラモ面白月ノ光モヨノツネナラヌホト□（塗抹）大方ナラヌト（ママ）ニ胸中カセメラル、程ニナクサメカネツソ、サルホトニ何ニテモナクサメカヌル事ヲハ都ニテモヲハステト云ハ此哥ヨリソ、惣シテ由緒ヲ云テキトクハナイソ、サレトヲハノ捨ラレテ侍ル時則此哥ニヲハステ山トヨムヘキ事モ□□□□只作物語ノ

哥ニテヤ侍ン、根元ノ□□□□哥ヨリハ□□キカ
　コレハチト思アル人カ月ヲミテ候ヘハ心アル人ニミセタイトソ、サレトタ、此月ヲミテセメラレテ如此云ソ」
一大方は月をもめてし是□□□□□れは人の老となる物（879）
大方トハ大概ト云ヤウナ心、十分ハ七八分ト云ヤウナ心、此哥ハ我セイヲ思カヘシテ云、人ト云物ハ今世後世ノ事サマ〳〵思ヘキ事カアルヲ只毎秋ノ月ヲナカメ来ル所ニ我身ヲ思カヘシテア、ハカナヤ、何故ニ我身ハ如此ヲイトナルソ、トカンシテヨムソ、コビ（ママ）タ哥ノ哀ナ哥ソ
　思カヘシテ歎所カカンソ、是ハ心ニ有哥ト古人ノ云タソ
一かつ見れとうとくもあるかな月かけのいたらぬ里もあらしと思へは（880）
月ヲ躬恒ニヨソヘテ云ソ、カツミレトハカク見レトソ、如此御入アリタハウレシケレト一方ニ我所ハカリニテモアルマシキ、タカ所ヲモ御問候ラメト、云テ恡惜シタソ、ウトクハウトマシキソ、シタシキ心カセヌトソ
　カツミレトハカウミツネヲミレト、カコチタソ
一ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならていつる月かけ（881）
新ハキコヘタレト二条家ニハ理ツメナトテ面白モナイト云哥ソ、義ナシ
　此集ニヨセイナキ共申哥ソ」
一天の河雲のみおにてはやけれはひかりと、めす月そなかる、（882）
コレハ只月ノヒカリノハヤクナカル、ヲ見テ天川共雲ノミヲ共水辺ノ縁ヲ云ソ
　月ヲ、シムトテ月ノハヤ事ヲヨメルソ
一あかすして月のかくる、山本はあなたおもてそ恋しかりける（883）
アナタヲモテノ恋ント云モ只月ニアカヌ心ヲ以テ云タソ
一あかなくにまたきも月のかくる、か山のはにけていれすもあらなん（884）
此夜ノ心ハ詞書ニマコトニ残多心見ヘタソ、山ノ端ニケテハアマリノヤウニアレト其時ノヤウカケウニ切ニ面白ソ、只時ハイカ、ナランスレト詞書ノサマカ面白ソ
　此山ノハヲ向ヤウミ（ママ）見レハ只イカイフリタソ、時ノ興ニイヘハナラヌソ
一大空をてり行月しきよけれは雲かくせともひかりけなくに（885）

田村ハ文徳ノ御事ソ、義ハナシ、雲カ隠セト月ハ渡如ナトソ、（カリニサムケンアレトツキニハスミタトソ、カクアレトツキニ廃セラレタソ）

一礒の神ふるからをの、も□□□□本の心は忘られなくに（886）」

イソノカミハフルト云□□□□〔密〕勘ニフルカラヲノハ枯野ヲイヘルカ、冬野ハ（ナヘテ）木葉草ノ色モ残ヌニ柏ハカレタル葉ノ枝ニツキテ春マテ落ヌヲ（ヒトリ）モトノ心ワスレヌトテヨメルトソキ、侍レ、カヤウノ事ハセツトテ可申事ニテモ侍ス、トテモカクテモアリナムカシ

哥心ハウトイヤウナ人ナレト旧人ヲワスレヌ心ソ

一いにしへの野中の清水ぬれ（ママ）けれともとの心をしる人そくむ（887）

イソノ神カラ旧友カンヲ思心ソ、恋ニテハナイソ、コレモ本ヨシト思シ水ナレハヌルキヤウナレト汲心也、ウトキヤウナレト元ノ好ヲ思テヨミテツカハシケリ

モトヨカリシ水ハヌルケレト汲心ウトヒヤウナ人ナレトモトノ好ヲ以テ云遣ス心ソ

一いにしへのしつのをたまきいやしきもよきもさかりはありし物也（888）

是ヨリフル事ヲヌルソ、シツノヲタマキハイヤシキヲイハン為ソ、タトヘハ始富終貧モ又ソレヲウチカヘシタ物ヲ其ヲカクス事モナイ友ニ古ト云物ニナリハテタレハ曲モナイ只今我行末ヲヨク」思ハムカ可然ソト何事ヲモイムシヲハトカメスノ習ナレハソ

シツノヲタマキトハクリ返シト云心ニテハナイ、イヤシキ云ン為、イヤシキモサカヘタリシ人モサカリハアル、時スキタルコトヲ思ハヨシナシトソ

一今こそあれ我そ（ママ）むかしは男山さかゆく時もありこし物を（889）

是ハ男ノ出家シタ物ノヨメル義モアリ、サカヘハ栄花ノ事ソ、又一ノ義ニハヲトコ山ト云ハサカト云ン為ソト云ト云儀モアルソ、イツレニテモソ

勘ニ男ノ遁世ノ後ヨミ侍トソキ、侍レトソ、カ、ルカウ云ハメツラシキ事ナシトソ、此ヲトコ山□□□□ニ□テサカ行ト云ン為ト見ルカヨキソ、只前ノ哥モコレモコシ方ハ□□ト思ヘキ事トソ

一世の中にふりぬる物はつの国のなからのはしと我と成けり（890）

是チトサル人ノ老タルヤウナカヨメル、何トナレハナカラノ橋ハ世ニ名高キ物ナレトフリ行ハ曲モナイ、エ、我身モ如此ハアルマシキカ、フリハテヌレハソカイモナイトソ、老後ノ

述懐ソ

フリヌルハフルサル、心ソ、ナカラノ橋ト我身ト云所ニ心カアルソ、サルヘキ人ノヨメルソ、此橋ニタイスル上ハ（ママ）

一さゝの葉にふりつむ雪のうれを、もみ本く立行わかさかりはも（891）

此葉ハ雪カツモレハ葉カシツメハ本カカタムク、ソレヲ序ニ云フ、我サカリノカタフキハテタ、サカリハモハ其サ□□□□ソト歎心ソ

雪ヲモクナレハモトカクタリミタル、」

一おほあらきの杜の下草□□ぬれはこまもすさめすかる人もなし（892）

ヲホフアラキノトス〔ム〕テヨムソ、ヲハラキ両説ソ、常光ノ弟子モ云カユルソ、草カ老ツレハ駒モクハス人モカラヌトソ、如此云ハ駒ハ無心ナ物、人ニトラハクヤシキ物、人ハ又タカキ心、其（ソ）如老ヌレハ我モ大小ノ人ニスサメラル、ソ、カモノヘンニアル森カ

上ハキコヘタカ、老ヌレハハ我身ノ事、駒トハ無心ナモノニモ又サル人ニモ、大小ノ人ニ老テハ不用ソ

一かそふれはとまらぬ物をとしといひてことしはいたくおいそしにける（893）

本ヨリトシト云ハ利ト云テコトシハイタクハエ、ハヤク暮タ〳〵ト云テ我身ハ老タトソ

一年ノ事ニテハアラシ、年々ノ事ソ

一をしてるやなにはのみつにやくしほのからくも我はおいにけるかな（894）

テルトニコリテヨムソ、一ノ義ニハ（船ヤ波ヤナト云ントテ）ヲシイツルト云義モアル、塩海ハヲシテルト云義、何ニアル共シラヌソ、難波ノミツトツヲニコルソ、カラクモハシン苦ノ心ソ

ミツト云此哥ニトリテハカリハニコルト習ソ、上ハ序ソ、カラキハ辛苦ノナレトタ、クルシキマテソ

一おいらくのこむとしりせは門さしてなしとこたへてあはさらましを（895）」

老ト云モノカコウスルトシリタラハ門ヲサシテ此方ニハナシト云テト云モアマリノ老ノカナシサニ云ソ、ハカナイ心ソ、ミタリノ翁色々セツアレトソレカアタラヌ事ソ、此ミタリヲヒカノセツニ人丸黒主猿丸赤人ナト云、大ニアタラヌ事ソ

アルマシキ事ノハカナイ事ヲネカウタカ面白哥ソ、ミタリ

ノヲキナ口伝ソ、此三首ハヲロカナ所カ面白トソ、神ノ和光同塵モヲロカニナルヲアリカ□シカスルソ

一さかさまに年もゆかなんとりもあへす過るよはひやともにかへると（896）

是モ老年ノ苦ノアマリニナラヌ願ヲシタソ、（アルマシキ事ヲ云カ哀ソ、トリアヘスハハヤキ心、年カ帰ラハ我老モカヘルヤトソ）

同二十廿七

一とりとむる物にしあらねは年月をあはれあなうとすくしつるかな（897）

哀アナウヒ物哉ト年ミ歎テハ過〳〵シツル人間ノサマソ、（光陰ノ事老者ノ哥ソ）

一と丶めあへすむへも年とはいはれけりしかもつれなく過る齢か（898）

ムヘトシ理ニモソ、如此思返テモ一途思事ハナイ、（ヨハイカノカハ哉、シカモハ然共、思トル道モナクテ過ルトソ）

一か丶み山いさ立よりてみてゆかん年へぬる身はおいやしぬると（899）

義ナシ、（此山ヲシキ□山ノヤウニヨメル□□□）イサ立□□□□行ンカ□ヤシキトソ、」下句ハヤサシケレ□□□□□二（三）句ニヨテ序ニモソノサマイヤシト云也

同三年二十二（ママ）午剋

一おいぬれはさらぬ別も有といへはいよ〳〵見まくほしき君かな（900）

エマカリヲマウテト云ソ、トミノ事ハ俄ノ事ソ、イレイナトノ事カ、フキヨ（不去）ノ別ト云、サラヌソ、不去ソ、生老病死ノ事ソ、（不去ハノカレヌ道ソ）

一世中にさらぬわかれのなくもかなちよもとなけく人のこのため（901）

千代モト祈ルト物語ニハアレト此集ニハナケクト云ソ、如此ナケクトイヘハ祈ルキハアルソ、一切ノ人ノ子ノ心如此アルヘキソ、（我身ヲハ勿論ナソ）

一白雪のやへふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな（902）

皆コ丶マテハ老ヲ歎ク哥ソ、此山ハ北路ノ山ソ、ヤヘフリシケルニハ星霜ノ心カアルソ、カヘル〳〵ハ行返リ〳〵ヲイヌトソ、我ヨハイノツモリ行事ヲ云ソ

カヘル山ハ雪深キ所、又星霜ノ事モアルソ、又コシハクレ

〈□ヲイタソ」

一おいぬとてなとかわか身をせめきけむおいすはけふにあはまし物か（903）

平生ハ只我イタツラニ老来タル事ヲワレトセメキケレト今日ハ如此老ス□カ、ル忝事ニモ何カアハントソ

セメキケン、ナケキ恨タ心ソ、ヲウミキナト皆御ノ心ソ

一ちはやふる宇治のはし守なれをしそ哀とは思ふ年のへぬれは（904）

チハヤフル宇治ト云ヲ万―ニ（ハ神祇ニアラサレト久シキ事ヲ云ソ）ミチハヤクフルウサキト云ン為ソト万ノ注ニ云事ソ、サレト当流ノ古今ノ上ニテハ其モ六カシキソ、ハシモリハ神ニテ姫ノ明神ニテマスホトニソ、ナレヲシトハ汝ノ如此云ハ何ソナレハカウ云ハ道ヲマモル人ノヨメル哥ソ、ナソニナレハ橋ト云物ハ普通ノ路ハ船橋チヤ、然ニ道ヲマモルモノホトニアレモ道ヲ守テ居テ年ヲヘタホトニナレヲシソアハレトハヲモフト云ソ、我モ道ヲマモルカ道イタツラニヘタト云心ソ

老タル人カ我身ヲ歎ク心テ橋守ノ事ヲ哀ムソ、裏ノセツ、学文ニトル、天ノウキハシト云モ道ノ事ソ、道ノ伝ノナカラン人ヲ師ニトルナト云ヲキテソ

一我見ても久しくなりぬ住の□□岸の姫松いくよへぬらん（905）」

久シクナリヌハ老タル□□□□□哥ソ、キシノヒメ松ハ（何トシタ事ソ）一本サシテ云ニテハナイソ、惣名カ、サレト又サウ□云ニモアラス、又チイサイニテモナイソ、只惣名ト意得ヘキカ

一住吉のきしの姫松人ならはいくよかへしと、はまし物を（906）

造作モナイ人ナラハ問ンスルモノヲマテソ

一梓弓いそへの小松たか世にか万代かねてたねをまきけん（907）

弓ハ枕詞ソ、イソヘノ小松タカ世ニカハ、ア、此荒磯ニ年ヲヘテ（アルヘクモアラヌ松カ）アルヘキマテハナイカ、タカ世ニカ行末遠クアレトテ種ヲウヘツラム、アリサウモナイ所ニ松カアルトソ、人丸ノ哥ソ、カ、リタツヨキ哥也、（ユ、シキ哥ソ）

一かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに（908）

カクシツ、ハ卑下ノ詞ソ、如此シテ世ノ星霜ヲサセル事モナウテトヲサメ、高砂ノ松ハ年ヘタシルシカアルカ、我ハ其シルシモナイトソ、（ナカラヘカイモナクテソ）（世ヲツクスミナニナシタト云事テハナイ、ヨヲイツトモナキ事ソ）

一たれをかも知人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに（909）
是ハ独老ハテ、居テ昔ノタレト云人モナクテ」アル人ハ皆当世ヤウノ人テ我ヲシルモノモナイニ、コヽニ高砂ノ松コソ昔ノ我時カラシリタ人ヨト思ヘハ其モ又我友ニテハナイ程ニサテタレヲカモト云タソ
只今ノ事ヲモ語合センスル友モナイホトニ昔ノ心モエイハヌソ、松モ又心カアラハコソトソ
＊以下五行書き落し、小字書入
わたつ海のおきつしほあひにうかふあわのきえぬものからよる方もなし（910）
（此哥一首落也）コレハ前哥ワタツウミノ注ソ、シホ合ノ淡ト云□物ハツイ方モナイモノカラ又キヘモヤラヌモノソト、其ヲ我見ニタトヘタソ
一わたつ海のかさしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路嶋山（911）
ワタツウミハ海神共海底共海道トモ云、其内ニコレハ海神ト云カ此哥ニアフソ、アハチ嶋ノ躰カユイタテタヤウナト云心、アハチ嶋ヲカサシト云タカ新哥ソ、遠望ノ心也、（浪ヲ以テユイタテ、アルト云哥ソ）
一わたの原よせくる波のしは〳〵もみまくのほしき玉つしまかも（912）
大海ニハ浪ノヨル事カシケキモノナホトニ、シハ〳〵モハシケ〳〵ソ、見テモ〳〵見マホシキホトニワカ吹上ノ眺望ノ心也
只イクタヒモ見タイソ、カモハカ哉ソ、カモトハウタカヒニモイヘトコレハ哉ソ
一難波かたしほみちくらしあま衣たみの、しまにたつ鳴渡る（913）
塩ソ満テクルラム、コヽヘタツカナイテクルハトソ、アマ衣ハタミノニヨソヘテ（ト云ハ海人ノ□□□□□ノ心モアルソ）□□□□満ノ方ヘ云ソ、コレモ遠」望ノ心ソ
一君をおもひおきつのはまに鳴たつのたつねくれはそ有とたに□く（914）
此哥面白哥ソ、貫之カ和泉ニアリシ時大和カラ忠房ハ受領ニテアタ、其比ハ延喜五ヨリハルカノ後ニ入タカ、乍去此集カ延喜イツ比周備シタト云事カナイホトニ又イカヽ、泉ニ居タヲ連々思タホトニ、ヲキツノ浜ハ泉ノ名所レン〳〵思タトノ心ソ、鳴タツハキクトイハントノ為ソ、アリトタニキクハワカタツネタレハコソアリ共御聞アレトソ、（我タツネクレハ

ソ御入アル共シリタトチト恨タソ）
ヲキツノハマノハレン〳〵思タトソ、ヲキツノハマイツミノ名所ソ
一おきつ浪高しのはまのはま松のなにこそ君を待渡りつれ（915）
高師ノハマモイツミノ名所ソ、浜松ノハタカシノハマノ松ハ高キ名ニキコヘタホトニ、サリ共此名所ヲハ御尋モアルヘキトコソ待申タレトソ、更私ヲ可有御尋トハ思ハスソ、此松カヤハキコヘスハアラントコソ待ワタリマイラセテ候ヘトソ
此名ヲ御聞ナイ事ハアルマシキホトニ此松ユヘニコソ御尋モ候ヘト真実ニハ御タツネモ候マシキト云ヤウニカヘシソシタソ
一難波かたおふる玉もをかりそめのあまとそ我はなりぬへらなる（916）」
コレハ述懐ノ哥、天子ニ仕ル者遊山シテアリクハイタツラノ事ナホトニ述懐シテヨメルソ、（イナカワタラヒスルハ時ニアハヌモノソト述懐ノ心ソ）上ハ詞ノ縁ソ、序ソ、ケリヤウ難波ノヘンニ我イタツラニヰタト云心、悉ク述懐ソ、此集サキナトノ事ニヤ、
一住吉とあまはつくとも長ゐすな人忘草おふといふなり（917）
忠峯カ相シリタ人（チナミノ深キ人ソ）カ住吉ヘ行テヲソクキタ所テヨメルソ、コ、ハスミヨクテアリト云共ナカヰナセソ、ナカヰモ住吉ノ名所ソ、又住吉ト云共人ワスレ草ノ生ル所ソ、世上ノキ如此ソ、ナカヰセナトソ、ヒツキヤウトクキタレトソ
一雨によりたみの丶嶋をけふゆけとなにはかくれぬ物にそ有ける（918）
タミノ丶シマ然モナニハヲヨソヘタソ、タミノ丶シマト云所ハ雨ニハエカクレヌソ、ヌル丶マテトソ
一あしたつのたてる河へを吹かせによせて帰らぬ浪かとそみる（919）
白ツルカ汀ニシカトナミヰタソ、更ニ白浪ノ立ルヤウナト時ノ興眺望□□□ヌルソ、西川ハ大井河トソ、カツラ大井西川□□□□アリ、ヘチ〳〵ト云モアリ、如何
テウハウノ哥ソ」
一水のうへにうかへる舟の君□らは□□そとまりといはまし物を（920）
中書ハアツヨシ、後ニハ式部卿、寛平ノ御子ソ、伊勢ハ寛平ノ御手モカ丶リ又アツヨシノ御手モカ丶リタソ、女ノ中務ハ

アツヨシノ子ナレハ（中書ト云）ソ、此哥君ハ船ト云心ニテハナイ、君御ト、マリアレトイヘハ□ナホトニ如此云タソ、（舟ニナソラヘテアルソ）

アツヨシハ延喜ノ御弟ソ

一宮こまてひゝきかよへるからことは浪のをすけて風そひきける（921）

カラコトハ所ノ名、如此云ホトニヒヽキカヨヘルト云ソ、浪ノヲスケテハ浪ノヲト云事ハナケレト則風カヒクホトニソ、浪ノヲノ引手ハタソナレハ風ソ作者ノ力量ニテ如此云ソ

〔ヒヽ〕キカヨヘルトハ名ノ高キ心ソ、浪ノヲト云事ハナケレトヲシテ云タソ

一こきちらすたきの白玉ひろひをきてよのうき時の涙にそかる（922）

コキチラスハコキタレマセナト云ト同事、只シケキマテソ、我袖ノ上ノナミタカ只タキノ白玉ノヤウナホトニソレモカリタトソ、如此云ハ世ノウイ事ヲヨク云立タソ

世ノウキ時ノナミタカスモカキラヌトソ

一ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに（923）」

伊勢物語ノ時ノ如タキノ白玉カ只更ニ水精ヲ乱スヤウナホトニ水上ニ人カヒキミタスカトソ、此セハキ袖ノ上ニ白玉カ如此落ルハトソ

上ノ句ハタキノナリソ、下ハ心ヲノヘタリ

一誰為にひきてさらせる布なれや世をへて見れとゝる人もなし（ママ）（924）

布ナレヤハ（布ナルヤト布ニテヤアルラントソ）ウタカウタソ、年ヲヘ世ヲヘテミレトトル人モナイハタカ為ニシヲイタトソ

一きよたきのせゝの白糸くりためて山分衣をりてきましを（925）

瀬〻の（ママ）白糸更ニ糸ヲ引ミタスヤウナホトニ是カシキノ糸ナラハ衣ヲリテキンスル物ヲトソ、タキト云ニ山ワケ衣カコトニ面白ソ

＊以下三行小字書入

一清滝の

セヽノ白糸ノ面白カアルホトニコレカマコトノイトナラハ山ワケ衣ヲヽリテモキヘキヲトソ、上古ノ本躰ソ

一たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山ひめのぬのさらすらん（926）

リウモンソ、コ、ハ昔仙人ノスム所ソ、仙人ハ立ヌハヌ絹ヲ
キルモノニテアルカ其仙人モナイモノヲ今ハ何ノ用ニ山姫ハ
タチヌハヌキヌヲハサラスランソ、又一面白理カアル、昔カ
ラタチヌハヌ衣キタ人ハナイモノニテアル□□□□□ランニ
コソ、其為ニ」布ヲハサラスヘキ□□□□□トソ、如此云ハ
サラニ衣ヲサラスヤウナト云ニツキテソ
イセカ仲平ニワスラレテ父カヤマトニ居タ時ヤマトヘコヘ
タ時仙ノイハヤナト見タトキヨムソ、哥集ニアハレナソ
一又(ママ)人ハシキノ人ソ、イツタチヌハヌキヌヲキルモノカア
ルカ、ア、ハカナク山ヒメノ衣ヲサ□□（コノ間欠）カウ
ヨミタイセカ心カアルソ、仲平ノ我ヲ思事モナ□□（コノ
間欠）山ヒメノ布サラスハカナノ心ト同物トソ
一ぬしなくてさらせる布を七夕にわか心とやけふはかさまし
(927)
此朱雀寛平ノ御事ソ、我心トヤハ我主ニナリテトソ、（宇多
ノ御門ノ御事ソ）
一おちたきつたきのみなかみ年つもり老にけらしな黒すちなし
(928)
ミナカミノカミヲカシラノ方ヘヤリテマ白ナタキヲ見テ如此
云ソ、（コレモテウハウソ、ワカ身ニ比シタソ）
一風ふけと所もさらぬ白雲はよをへておつる水にそ有ける(929)
更白雲ノ如ナソ、建立カ面白ソ、白雲ノヤウナレト所ヲハサ
ラヌトソ、（タキノテウハウトソ）
一おもひせく心のうちのたきなれやおつとは見れと音のきこえ
ぬ(930)
コレハモウ文徳天皇（田村トソ）ノ御子ヲ持マイラスルホト
ノ人ナレト女ハタヘス思ノアル物ナレハ其心ヲコヽヘトリエ
シテアノエノタキハヲツトハミレトヲトカキコヘヌホトニ如
此云ソ、我思モ又如此ソ
女房ノサフラヒハ大判所ノ事、キノセイシナトラカムスメ、
我物思ノ比ニテモヤ、エノタキヲ我胸中ニタクヘタリ」
一さきそめし時より後はうちはへてよは春なれや色のつねなる
(931)
義ナシ、ヤウカ面白マテソ、（サキ初シハ此絵カキケル時ノ
事ニコソ）
一かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそ渡れ秋のうけれ
は(932)
コキタレテハ桑コキタレテト云ト同事ソ、ナミタノツヨク落

ルソ、カリテホスナト云モ此エニカリヤ山田ノイネヤナトアルエヲソト立入テヨメルソ

屏風ノ絵ニアルカリヲカリテトソヘタソ、ヒツキヤウヲトシツクル所ハ我ナミタノ事ソ

同三年三十三辰　延徳二十廿八

古今和歌集巻第十八

雑哥下

一世の中はなにかつねなるあすか川きのふのふちそけふはせになる（933）

アスカ河ノフチセノカハルヲ見テ世ノ中ハイツレノ事イカナルワサカツネナラムト思トル心ソ

一いく世しもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思ひみたる、（934）

海士ノカルモト云モノ□入テタケモアリ、深ク□タソ、ハカナキ事ヲワ□□□□□ソ

カルモハミタル、ノ□ニヲキタレト□□ヤサシクナルソ」

一かりのくる嶺の朝霧□□□□□思ひ尽せぬ世中のうさ（935）

此哥ハクルミヲタチ入タト云人アル、サラニ用□ナイ事ソ、朝霧マテハ序ナレト何トナウ秋霧ノ立折節カリノナキワタリテ秋ノウレヘヲ催ソ面白哥ソ

上ハ序ナレト上ハカリニテハナイ、ユウニナルソ

一しかりとてそむかれなくにことしあれはまつなけかれぬあなう世中（936）

是モ身ノハカナイ事ソ、サウアレハトテ何タル事ニモヲトロク事カアレハア、トハナケキ〳〵スレトイタツラニスクスソ、年〳〵世ヲモイトハントハ思コソスキヌラメトソ

事シアレハヲ下ヘツケテ見ルソ、詞ツカイキトクソ

一宮こ人いか、と、は、山たかみはれぬ雲井にわふとこたへよ（937）

哀ナ哥ソ、甲斐国ナト云所ハカイノシラネナト云テ高山ノヲホヒタ其下ナトニテモソヨミツラメ

下句カイノ白ネナトノ陰ニ我人ノウツモレ□タ哀ナ躰ソ

一わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなむとそ思ふ（938）

三河掾ソ、其時小町ヲサソウタソ、我身ニ物思アマリタホトニ身ヲウキ草ノト云ソ、落着ヲ思定ヌホトニサソウ水アラハイナントソ思ト」云タソ

ワヒヌレト、云ニ色、コモルソ、身ヲウキ草ハ小町カ落着

思定ヌ心哀ナソ

一あはれてふことこそうたて世中を思ひはなれぬほたしなりけれ（939）

アハレテウチト物ヲ憑ヤウナナリソ、世中ハ思ハナルルタニアルニチトタノム事カ有程ニ、ウタ、ハナヲ〳〵（弥）、思ハナレヌホタシトナリタソ

タ、タニモ難捨世ニイサ、カノタノミカアリタルソ

一哀てふことのはことにをく露は昔をこふるなみたなりけり（940）

トアリシ物ヲカウアリシ物ヲナト云コトノハヲ思出レハヤカテナミタカコホル、ソ

哀ト□□□（昔ハ）チトヨサマサリシ事ナト也、カウ云テトテ理リタソ

一世の中のうきもつらきもつけなくに先知物はなみた成けり（941）

ナミタニモツケネ共ウイニモツライニモ只コホル、ソ、面白躰ソ、（義ナシ）

一世の中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらすありてなけれは（942）

コレハ只世中ヲハ夢ト云ヘキ物カ、ウツ、ト云ヘキ物カト定ナキヤウヲ世上ヲ云ソ

我心ヲムクウニアツカウタカ面白ソ

一世の中にいつらわか身の有てなしあはれとやいはむあな〔う〕とやいはん（943）

イツラト身上ヲ□□□□□有カトスレハナイ」モノソ、アハレ不便ナリ□□□□□ン、ヒタスラウイ物トヤ云ントソ

イツラハトカメテトリア（ママ）我身有テナシ、不便トヤイハン、

ヒタフ□□（コノ間欠）トソ

一山里は物のわひしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり（944）

昔ハモノサヒシキト云タ哥ソ、サヒシキハ一ニテハツルソ、ワヒシキハ色ミコモルソ、山里ハ万物ノタラハヌ事モサヒシキ事モサマ〳〵ウイ事アレト世中ヨリハスミヨキトソ、苛政ハ虎ヨリモハケシト云事ソ、トラノ多所ヘイテス時ナソニコ、ニスムソト云返シソ

ワヒシキハサヒシキヨリハ尚哀ソ

一白雲の絶すたなひくみねにたにすめはすみぬるよにこそ有けれ（945）

是タカハ文徳一ノ御子ニテ十善ノ位ニモ御ツキ有ヘキニ如此ハコレタカノ一生カ見ルソ

コレタカノ□ノ事カアルトミレハヨキソ、モトヨリ心得ラレタル哥ナント

一しりに剱きゝてもいとへ世中は浪のさはきに風そしくめる（946）

世上ノ物ウイソウ〳〵ノシハマキレヌ物ナホトニシリニケムソ、モシシラスハキゝテモイトヘソ、風ソシクハシキリナソ、世中ハ浪ニ風カ吹タヤウナ物ナホトニ人ノ上ニキゝテモイトヘソ

シリニケンハ世ノ不定物サハカシキ事ハマキレヌ物ソ、但シラスハキゝテモイトヘトソ、シクメルハシキリソ、カウ云ハ人ヲモヲモヘ我身ヲモヲシフルソ」

一いつくにか世をはいとはむ心こそ野にも山にもまとふへらなれ（947）

マトウヘラソ、勘ニ世中ヲイトウトテモイツクニカ隠レ行ヘキ心コソ野ニモ山ニモアルヘクモヲホヘネ此心ヲ以テ如此思ヘハ心カ野ニモ山ニモ迷フラメソ

カウ思心カ則ノ山ニマヨウ心カアルソ

一世中はむかしよりやはうかりけむわか身ひとつのためになれるか（948）

コレハ二ノ理カアルソ、我身一ノウサニナリタウイニナリタ世テコソアルラメ、ヤハノハヲステ、昔ヨリヤウヰ物テヤアリケン、又我身一ニナリテヤアリケント二ヲウタカフソ

世〔中〕ト云物カ昔ヨリヤハカウウカルヘキ、我身一ノ為ニカウ□ナリタルカトソ

一世中をいとふ山への草木とやあなうのはなの色にいてにけむ（949）

世ヲイトフ山ニアル草木ナレハヤアナウイト云ソ、色ニ出テサクラウトソ、我気カラ云タ物ソ、卯花ソ、此哥ニ先上代ノ哥ニテ面白ソ、草木トヤト入タカ面白ソ、悉皆此哥ハ世ヲステ山居シタアタリ〳〵ノ卯花ヲウチナカメテヨメル物ソ

世ヲノカレタル山ノ草屋ノアタリノ卯花ヲミテ我ノミ□□花モヤ、世ヲウイトヤトソ

一御吉野の山のあなたに宿もかな世のうき時のかくれ家にせん（950）

山ノアナタニハ山ヨリ□□□□□ニト思入ルニ至テ」世ノウイ所カキコヘタ□（□ナヘ□□□ヨシノニテハ叶マシキトソ）

一世にふれはうさこそまされみよしの、いはのかけ道ふみならしてむ（951）

是モ岩ノ陰道ト云人モアルソ、岩ノカケ道フミナレントソ、此山ハ限ナウ深山ソ、岩ノカケ道フミナラシテント理ヲイハヌ所カ面白ソ、何カ如此セハ安空ハアランスレトソ、世ノウキヨリハト同事ソ

一いかならんいはほの中にすまはかは世のうきことのきこえこさらん（952）

是ハ外道ノ巌ノ中ニカクレテ生死ノ至所ヲ以テ其ハカリニテハ曲モナイソ、イカナルイハホノ中カ如此ノ世カコヘコサラント尚タツヌル所カ面白ソ

四人ノ外道サマ〳〵ノ事カアリタソ、猶世ノ事ノキコヘヌ所カアランスラムトソ

一足引の山のまに〳〵かくれなむうき世中は有かひもなし（953）

アシヒキノ山ト云ヨリイクラモ奥深所カアルソ、マニ〳〵ハ任テト云ソ、必山奥住タラハ必身ノヤスカラムト思所ハナイ、只山ニマカセテソ何ニナレハ有カイモナシナ程ニソ

山ニ任テカクレナムトソ、マカセテト云肝心ソ、山ニウチマカセテ身上ヲハトソ

一世中のうけくに秋ぬ奥山のこのはにふれる雪やけなまし（954）

ウケクト云ハサムケクナト云テニハソ、奥山ニ行死ニ」行テ死ントソ、柏木殿ケリヤウ梢ニ消ン共云ヘキ哥ト被仰イカ、、木葉トイヘハハカナイ所カ面白ソ

木葉ニフレルト云ハモロキ事ヲトリ出テ我身ヲ比フルソ

一世のうきめ見えぬ山ちへいらむには思ふ人こそほたし成けれ（955）

義ナシ、面白クキトクナソ、カナツカヒアルヘキト見ヘタハコ、ソ、（盛郷各別ノ口伝カアルソ）

一世をすて、山に入人山にても猶うき時はいつちゆくらむ（956）

義ハナイソ、是モワカ身ノウイ所カラヨメル哥ソ

一今更になにおひいつらむ竹のこのうきふし、けきよとはしらすや（957）

義ナシ、不便ナ哥ソ

一世にふれはことのはしけきくれ竹のうきふしことにうくひすそなく（958）

竹ハ葉カシケキ物也、フシト云旁ソ、世ト云モノハ事ハシケ

キハ世上人ノ為ヨカラスヤ、無用ノ云事カ多、其ヲキケハ只ナク竹ノエンヲ以テウクヒスト云タソ

タケハウキフシ為、ウクヒスハナミタノ為ソ

一木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにわか身は成ぬへら也（959）

ハシニハハシタナシ心□□津内親王ノ哥ソ、桓武」ノ皇女ソ、不慮ニ入内□□シテアレトモカイモナカシホトニアソハシタソ

竹ハ草ノ部ナレト草木ノ外ト云ハコレヨリソ

一わか身からうき世中となつけつゝ人のためさへかなしかるらむ（960）

ウキ世ソ〳〵ト身ノウイカラウキ世ト名ヲツケタ、サアレハ又人ノ為サヘウキ世ト云ホトニカナシカルラムソ

一身ノカナシト云ヘハ又人ノ為マテナリタトソ、ワカ身カラトハ世間ノ事ト云義アリ

一おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは（961）

ヤソシマカケテコキ出ヌナト云時ノ事ソ、ヒナノ別ハ都ヲ遠ク行心ソ、ナハタキハタクル心ソ、必タカムラカイサリセンマテハナケレト海人ニ交テ身ヲホシタトソ、イサリハ火ヲタキレウヲスルソ

一わくらはにとふ人あらはすまのうらにもしほたれつゝわふとこたへよ（962）

田村ハ文徳ソ、宮内ハ禁中ソ、ワクラハゝタマサカニト云心ソ、モシタマサカニモ行平ハト云人アラハスマノ浦ニモ塩タレテ居タト云テクレヨトソ

事ニアタリテハ流罪ノ事ソ、伝ニハナイソ、ワクラハゝタマサカニモトフ人アラハトソ

一あまひこのをとつれしとそ今は思我か人かと身をたとる世に（963）」

トケテハ闕官ノ事ソ、此心ハケツ官セラレテアレハ歎ニ我カ人カタトルヤウナ所人シルタヨリアリテ音信ヲコシタアルホトニアマヒコト云物ハ物ヲコタウル時トレカトレヤラムノヤウニ我カ人カタトルホトニ如此云タソ、コレヲ柏ノヲトツレシトシヲニコリテアソハスイカゝ

ヲトツレシトニコリテ柏木殿被仰タ、此方ハスムソ

一うき世には門させりとも見えなくになとかわか身のいてかてにする（964）

建立ノイカメシキ世ソ、門ナトサシタ所コソイテラレヌニ何カ出カテニスルトイカメシキ哥ソ

コ、コソ世ヲノカルヘキ所ナレト猶ステカヌルキソ

一ありはてぬいのち待まのほと計うきことしけき思はすもかな

(965)

義ナシ、一切衆生ノタイニヨメル哥ソ、アハレ〳〵

一つくはねの木のもと毎に立そよる春のみ山のかけを恋つゝ

(966)

御子ノ宮ハ東宮ノ御事ソ、タチハキハ春宮ノ御入ナキ時ハツクマシキ官ソ、不奉公ノ哥ソ、ツクハネハ君カカケヲヨミナラハシタソ、春ノミ山ハ東宮ノ御事ソ、チト此哥ハ東宮カタノ人ヲタノムト」云心カ

一ひかりなき谷には春もよそなれはさきてとくちる物思ひもなし(967)

詞書ニ見ヘタソ、徳ハ失ノ理ナホトニ只メクミノナイ身ソタノシミナトソ、サキテトクチルハ花ハエイ花ソ

一久方の中におひたる里なれはひかりをのみそ頼むへらなる

(968)

是ハ家ノ集ニハカハル、其ハ京ニテヨメル哥ソ、寛平ノ御子ヲ以テカツラニヲイテ我ハ七条ノ后ニ宮仕時月ノ中ノカツラノ人ヲ恋フトテヤ、タヘスナミタノ雨トノミフルトアソハシタ返哥ソ、コ、ニテハ用ニタ、ヌ事ソ、コレハ詞書ノ如アルホトニ久方トイヘハ月モモツホトニソ生ルソ、中宮ハ秋宮ト申間月ヲカタトリ天子ハ日ヲカタトル間ヒツキヤウ中宮ノ御ヒカリヲタノムトソ

月ノ中ノカツ□□人ヲ恋トテヤ

一今そしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかりけり

(969)

トシサタヲ待ハ〳〵ヲソキホトニ今シリタホトニ人スマン里ヲハト云ハ世界ノ事ソ、如此云内ニトシサタ」カヲソキ所カコモルソ

延徳二十廿九

トシサタハナリ平ノチナミノ人ソ

一わすれては夢かとそ思ふ思ひきや雪ふみ分て君をみんとは

(970)

此詞書ニテコレタカノ躰カ見ヘタソ、此山里ニヲイテコレタカヲ見マイラセントハマコトニ夢ナトニテモアルカトソ

此詞書永〻トカイタカ餘情ソ、イセン申コトクコレタカノ

御コトソタ、夢カトソヲモフカキトクナソ

同三三十四辰

一年をへてすみこし里をいて、いなはいと、深草野とや成なん

(971)

物語ニハアキ方ニナリタトイヘト此集ニハサハイハヌソ、サレトモシヤサモヤ、義ナシ、立別テ行ニモ其者ヲ不便ニ思心カナリ平ノ心コモル、哥サマモ幽ナソ

一野とならはうつらとなきて年はへむかりにたにやは君はこさらん(972)

モノカタリニハナキヲラムトアレトナヲシテ入タソ、奇特ノ直シソ、カリハノ事トカリソメトマセテ云カ大ニウタテシキ事ソ、カリニキテハウツラナムノ身ニナラムスルソ、只ウツラトナリテナキヲラム、カリナルホトノタヨリニモヤアツカラムト云テソ幽ニハナレトソ、女ノ哥ニ又恨ナキ事言語道断ソ、コレ又世上ノ理ソ、恨ル事アリ共如此ハ又アハ□□シキトソ

カリニタニヤハ、ソノ事トナウ何事ニモヲホシ出ル事アラハソ」

一我を君なにはの浦に有し□はうきめをみつのあまとなりにき

(973)

ワレヲナニハノ事ニモ思ハヌサマニアリシカハトイハテハ意得ヌソ、ウキメヲミツアマトナリタソ

二三ノ句心得カタキホトニヨクコトハヲ入テ見ヨ

一難波方うらむへきまもおもほえすいつこをみつのあまとかはしる(ママ)(974)

ヘキ間ハアイタトソ、人ヲ恨ルモホトカアリテコソアレトソ、心ノソコヲ見テ尼ニナリタルソ、海士ハナニハニソヘテ云ソ、恨ルト云モ年々ホトツモリテ後ノ事トソ

恨ヘキマモヲモホヘスカ面白ソ、ホトカアリテコソニテトソ

一いまさらにとふへき人もおもほへすやへ葎して門させりてへ

(975)

人ノ問ヘキヤウナモノモトハスナリハテ、アル時ヨメルソ、カトサセリテトクカイヘコ、モトノヤウハアルソトイヘトソ

門サセリトイヘトコクウニ云タソ、ムクラヲ以テ門ヲサセリトイヘトソ

一水のおもにおふるさ月のうき草のうき事ありやね(ママ)を絶てこぬ

(976)

サ月ノウキ草ト云、夏ハウキ草シケキモノナレハソ、此方ニウク事カシケウアルヤ、ネヲタヘテ御入ナイソ、一句ニ絶タ事ソ

ウキ事ノ為ニサ月ト云、此方ノ身ニソナタノ為ニウイ事ハシ御入候カトソ

一身を捨てゆきやしにけむ思より外なる物はこゝろ成けり（977）

人ヲワカ十分ニ問ヘキ事カアルヲトヤカウヤアル時アナ」タヨリ（アナタカラ）恨ル時ヨメルソ、サテ〳〵モソナタヲ問マイラセ久キヲ如此アルハ身ヲステ、私ノ心カヨソヘハシ行テアルカトソ、此方ニアラハトヒマイラセヘキトソ、

我心カ身ニアラハソナタヲトヒ申サヌ事ハアルマシキカサヤウニアルハ心ハシイツ方ヘモ行タカトソ

一君かおもひ雪とつもらは頼まれす春より後はあらしと思へは（978）

詞書ヨリキコヘタソ、（コ、マテ三首皆ミツネソ）

一君をのみ思ひこし地のしら山はいつかは雪のきゆる時ある（979）

コレモ聞ヘタソ、白山ノ雪消ル事カアリテコソトソ

大方ノ雪コソ春ヨリ後ハナイモノナレコシハイツモ雪カアルホトニソノ如ヲモフトソ

一おもひやるこしのしら山しらねともひとよも夢にこえぬよそなき（980）

詞書ニアラハルヤウモナイソ、彼本夜ソナキトアルソ

一いさこゝにわか世はへなむすか原やふしみの里のあれまくもおし（981）

題シラスヨミ人シラスノ事第一ノ巻ニ申タ事カアルヲ猶コ、ニ申事カアルソ、神詠ナト至ノヲハカカヌソ、此集ニ御門ノ御哥□入云事カ見ヘヌソ、此集一部カ皆御門ノ御哥□□□□〔カアレ〕一部ヲエラハレ民ヲ」撫百姓ヲ収ル儀アレ□□□□□天子ノ御哥ト云儀ソ、コレハ神明ノ御哥トテコ、ニワカ代ハヘナムト云、フシミト云モ名高キ所テアルカ如此アレ行カヲシイトソ、我シハシモ住テアラサヌヤウニセムトソ、ヤマトノフシ見ノ事ソ、只此国ノ心マテソ

伏見トタ、云ハ山シロスカハラトイヘハ和州ソ、此哥裏ノセツハ日神ノ御哥、伏見ト云ハ此国ノ事ソ、此国ハ神国大道スタレテ仁義ヲコルソ、末代ニナレハ又仁義モスタルホトニソレヲ神カ哀給テ、アレマクモヲシハ人ノ心欲心シシ

ヤウナルホトニ罰ト賞共此時ヨリヲコルソ、只無為シセン
ノ所ヲ思ヘトノヲシヘソ
一わかいほはみわの山もと恋しくはとふらひきませ枕たてるかと（982）
我イホハ垂跡ノ立所ノ事明神ノ御詠ソ、然間此神ヲアカメント思物アラハ来レトソ、枕立ル門ハ口伝ソ
ミワノ山本トハコヽニ和光ヲホトコス事、恋シクハトハ神ノチカヒヲシタハヽトソ、裏ノセツ、我庵ハスイシヤクノ立ト、ミワノ山本トハ此ヲタマキノ事ナト云ハ不用、ハカナキ事衆生ノ貪瞋恚ノ三毒ノ高ヒキ所ヲ三ノ内ソ、コヽヲコヘヨ〳〵トマネク所神ノ和光ソ、此三アツマル所地水火風空ノ五蘊ニ集ル、此五ウン内心地ノ和光ノアルカ神ト云、心地ノ和光ト云ハ慈悲正直ソ、コレハ神ヲカラヌ和光ソ、心地ノ和光ニアラスハ此輪ヲハヤフラヌソ
一わかいほはみやこのたつみしかそすむ（ママ）（983）
此作者身ヲ収メ心ヲ安ンシテ住人ナレハ迷ル者ハコヽヲウチト云ンスレト此人ハウシ共ヲモハヌソ、又タレモ此作者ノ如世ヲノカレスミ得タラハ人ミノ喜撰ニテアルヘキソ
キセンハサトリノ人ソ、シカソスムハサトリエタ所、世ヲウチ山トハマヨヘル人カ云必キセンニカキルヘカラス、思トル人アラハ人々ノキセンソ、裏ノセツニ我イホヲ五蘊ノ事ソ、天台ニ王舎城ノ注ニ王則心王舎則五蘊城ト云ハ本覚法身ノ都ソ、コレヲサトレハ則心ニミヤコノ立タトソ、シカソスムト云ハ住得タソ、迷ヘハ六塵ノ山ノアルヲ世ヲ宇治山トハ云也
一あれにけりあはれいくよの宿なれや住けん人のをとつれもせぬ（984）
昔サル人ノ住タナト云アトノ其人ノ行末モ不知ナリヌル、又其ユカリナトモ問モコヌ其躰ヲ見テヨメル哥ソ
タヽハヤノ疎屋ニテハアラシ、裏ノアレニケリ、衆生ノキノアル、所ヲ云、住ケン人ノヲトツレモセヌトハ仁ノキヲモチ失事ヲ云ソ」
一侘人のすむへき宿と見るなへになけきくはゝることの音そする（985）
是モコヽニテ宗貞ト書テ入タモ女ノ所ヘト云トイヘハカ、元ヨリ俗ノ時ニテモアレソ、アレタル家ニト云程ニ侘人ノ住ソスルラムト思ヘハ此コトニ愁ノネカ有ソ、ウヽコトハリト歎加ル音カスルトソ

引コトノネニ哀カナシキ一声カアルソ、逸者楽其吟怨者ハ悲其吟ナホトニソ、裏―ワヒ人ト云ハ無明ノ一念ヨリ生来タルモノ、満ルヲカクコトハリヲアルヲワヒ人ト云、其内成事皆歎ニアラスト云事ナシノ心――（ママ）

一人ふるすさとをいとひてこしかともならの宮こもうき名成けり（986）

是ハ奈良ノ都ト云ハ（宮コニテ人〻フルサレタ物ソ、コ、モ人カフルス里トソ）人ニフルス里テアルホトニ此作者モ人ニフルサル、人ソ、何事ソノ祈ニハツセヘマウツルトテナラニトマリテ我里コソ人ヲフルス里ト思ニ奈良ノ都モ人ヲフルスサトテアリケルヨトヨメルソ

裏―人ノ定相ノナイ物カコ、ヲアソコトスルモノソ、タトヘハカケヲニクミテハシルカ如、富貴ハタ、其人ノ果ニアルヲ定心ナキニタトフルソ

一世中はいつれかさして我ならむゆきとまるをそやと、定むる（987）

此心ハ大方モ聞ユレト古郷トイヘトスミハツル習モナクマシテ暫時ノ宿ヲモナカラヘテスメハスマル、習モアル程ニイツクカサシテ我トタノマントソ

サム時〳〵ノ一心ヲカロンシテタニ居レハヤスキソ、此三首身心ヲヨメル内コレヲ身ノ方ヘトルソ、裏―世カイハ常住ナレ共一身生来レハイツクモカリノヤトリトノイツクヲサシテ我物ト思ヘキソ

一相坂の嵐のかせはさむけれ□ゆくゑしらねは侘つゝそぬる（988）」

此三首ノ哥セミ丸□□□サムケレトゝエゝコゝハ嵐ノサムケレト行末ヲシラネハ如此シテモスムソ、此行末道ニテハナイソ、ワヒツゝソヌルト云ハ詞ヲイタワリテ云カ、不然ハネサメナトニモヨメルカ

行末ヲ更タノム理カナイホトニコゝハサムケレトトソ、ワヒツゝモフルト云ヘキ哥ヲヌルト云、ネサメノ哥カ、相坂トハ五形カアヒアフサカヒヲトリタ、嵐ノ風トハ五形ノ相坂カアルハ有為転変ノ嵐カナウテハカナハヌソ、コゝハ更ニ行末ハテモナイホトニチカラナクコゝニスムソ、只此五形ノ相会所ヲヨクサトレトノヲシヘソ

一風のうへにありか定めぬちりの身はゆくゑもしらすなりぬへら也（989）

我進退ノ更ニ一思定落ツク所モナクテ住所タノム所モナイ我

身ヲ風ノ上ノチリニソヘテ云ソ、是マテ三首ソ
ツキニ行末モ思定ヌホトニ云ソ、コレハツキニ心身ノハテヲ云ソ、裏―風ノ上ニトハ風臺ノ上ニチ□トハ土ヲカタトル、二アレハ□ハ皆ソナハルソ、サテ如此身ト云モノハ落着ナ事ト云所ソ、百年則万年ノハカリ事ヲメクラストソ

一飛鳥河ふちにもあらぬわかやともせにかはり行物にそ有ける（990）

是ヲセニカハルト云ホトニ銭ニ立入テヨミタト柏木殿被仰、二条家ニハサナキト云コトヨク人ニ云テキカセヨトソ、アスカ河ト云事カキトクソ、アルイハ又フリテヤフル、モ天然又火災ナトモ天然又如此アルモ天然ヲ観シテ云タマテソ、コレハムスメノ中務ニ伝受ノ哥ソ、マツ哥ノサマモヨキソ、又心世上如此タニ思ヘハ恨モナイヲコリモナイソ、コレハ親ノ子ニ伝受シタカ面白殊勝ナ事ソ

富テ作ルモタノシミニアラス、貧テウルモ恨ニアラス、惣而伝受ノ哥ト云テアル古哥ヲモワカ□モサスル事カ昔カラアルソ、是ヲチラト人ニ云時ハ昨日マテサカヘヲコル所ヲ今日ウルモ此川ノフチハセトカハルト云ト同事ト云テ□ケトソ」

一古郷は見しこともあらすをのゝえのくちし所そこひしかりける（991）

碁ヲ立入ル、昔ノシムノ王（ワウ）室仙家ニ入テ碁ヲ見タシ事ヲ以テヨメルソ、見如ニモアラサレハ昔ノ人ノ心ノヤウニモアラサレハ古郷ト云カイモナイホトニカリソメノツクシナレト人ノ心カ和タレハツクシカ恋シイトソ

辺土遠国ト□ト人ノ和スレハ親疎ナイト云事ソ

一あかさりし袖のなかにや入にけん我魂のなき心ちする（992）

女ト云モノハハカナイ事ニモ執カヒカレテハカナイ物ナホトニ如此ヨムソ、コレマテ可云事テハナイ、コレヲハ道ニハキラウソ、是ハカリソメナル物語シテコレホトマテ云ヘキハ定心カナイホトニ人ニムツフヘキモ其ホトラヒヲヨクシレトソ

女ト云物ハカリソメノ友ヲモツヨクトモムツヒヲスルニヨリテカリソメノ事ナレトカヤウニアカサリシト云ソ、大方ノキニハカヤウノ事ハ事スキタルト云ソ

一なよ竹のよなかきうへに初霜のおきゐて物を思比かな（993）

宇多ノ御門ノ御時モロコシ舟ヲ被渡時ノタ、フサハ判官ソ、寛平六□ノ事ソ、大使一人（副使一人并）判官四人、判官ハタウニ□□□□ヲスルモノソ、東宮ノ」侍ニテ皆心ウチト

□□□□ナトヲノム時ヨメルソ、東宮モ竹園ノ心ヲ持□□□ルソ、ナヨ竹ハニカ竹ヲ世永ニヨセテヨメルソ、上ハ所ソ、霜ハヲキ居テノ為ソ、物ヲ思ハ遙々ノタウヘ行ヘキ事ヲ歎テソ、又祝言ソ

ナヨタケノ世永ナトハ何トナウ東宮ノ御世ヲ云ソ

ヲキヰテ物――トハ今此ナツカシキヲハナレテモロコシマテコキワタラム事ヲ思ソ

一風ふけはおきつ白浪立田山よはにや君かひとりこゆらん（994）

此哥ハ左ノ注ニ見ヘタソ、コレヲ顕ニ顕昭カヲキツ白浪ヲ盗人ノ事ヲカキタリタ然、今案ニハヲキツ白波ハ立田トイハン為、風吹ハ、ヲキツシラ波云ン為ソ、万葉ニ（ヲサタノ大キミト云人）イセノ山ノヘノ御井ニテヲサタノ大キミノ哥ニワタツ海（ミナソコ）ノヲキツ白浪立田山イツカコヘナン君カアタリミントヨメルホトニ其如ニコレハ盗人ノ理カアラハヤトソ、定家盗人ノ事トハキ、キ、此今案可興可仰、ヤマトニハアラヌカラ衣ノタクヒナラン、コロモヘスシテイハントテカラ衣ト云、カラ衣ト云ントテヤマトニハアラメ（ママ）ト云タソ、皆〳〵上ハ序ソ、」此哥ハ貫之カ哥ノ本ト云タトソ

奥義抄ニ貫之哥ノ本ト云ト云セツアリ

一たか御祓ゆふつけ鳥かから衣立田の山におりはへてなく（995）

コレハ只立田ノ里ノ鶏ヲキ、テヨメルソ、タカ御祓ノユウツケ鳥ニテカカラ衣―、ヲリハヘハウチハヘ同コト事ソ、哥ノマ、ハタラヌソ

ミソキノトキハユ〔ウ〕ヲ付ル事カアル、タカミソキノユウツケ鳥ニテカカラ衣立田ノ山ニオリハヘテナクトソ

一わすられん時しのへとそはま千鳥ゆくゑもしらぬあとをとゝむる（996）

是ハ人ヲチト恨タ者カ文一書ヲイツナトシテ我ヲ自然ノ時ハコレヲミテワレヲ思召出ヨト云タ哥ソ

又人ノ上ニテモ此理ソ

一神無月時雨ふりをけるならのはの名にあふ宮のふることそこれ（997）

貞観ハ清和ソ、聖武ヨリ十二代斗ソ、奈良ノ御門ノフル事テム、神ナ月ハ時雨ト云ン為ソ、シクレフリヲケルハ万ノ言葉ヲアツメタ心ソ、又神無月ハ御タツネカ十月斗ノ事ニテヤアルラントソ

万葉ハヨク難知モノソ、神ナ月ハシクレラン為、シクレハ

カウシヲキタト云ン為又御タツネアル時十月ハカリカトソ
一あしたつのひとりをくれてな□□□□の上まてきこえつかな
ん（998）」
哥奉レト云勅定□□□□ハナウテソヘタソ、是ハ述懐ノ心
ソ、アシタツノヒトリヲクレテト云ハツカサナトナリノホル
ヘキヲ如此アルヲタレモ君ニ申次テタマハレカシトソ
惣ノ哥ノ外ニ此哥ヲ加タソ、ヒトリヲクル、ハ官位ノ事ツ
カナン、御申有テタマハレトソ
一人しれす思心は春かすみたちいて、君かめにも見えなむ（999）
是モケウ中ニチト望事アルヲヨメルソ、此愁ノ心カ君ノ目ニ
モシラレタイトソ
コレモ官位カ何ソ望ノ有トキヨメルニソ
一山川のをとにのみきくも、しきを身をやすなからみるよしも
かな（1000）
コレハ寛平ノ御門ノヲリ居マシ〳〵テ後七条ノ后（中宮）ノ宮女テア
リツルカヲリ居ニヨテ伊勢モスマヌ程ニ今ハヲトニキ、タソ、
山川ハヲトニト云ン為、身ヲハヤナカラハ昔ノヤウニテ見ル
ヨシモカナトソ
寛平ノ御門ヘマイラスル哥ソ、身ヲハヤナカラヨミ出タ物
ソ、内裏住ツケテ有カ今ハヨソニキ、タトソ、ミヲハ深キ
水、ソレヲタトヘテ云ソ」
同三年三十八午　延徳二十一二
古今和歌集巻第十九
雑躰短哥
サツ哥ト云ハ四季恋羇旅賀等ヲ色々ヲ交タソ、是ハ又躰ヲ交
タソ、長哥セントウ哥ハイカイナトソ、短哥ト云ニツヰテ古
来ノ難儀事キレサルソ、（万―長哥ヲ短哥トカイタカ一首ア
ル由申、所見ナシ）崇徳（久安ノ比）ノ御宇ニ百首ヲヨマセラル、時人数
十二人カソ、其内短哥ヲ一首マイラセヨト被仰タ、此集ニア
ルニツヰテ（ハシ）被仰タカソ、俊成千載ノ時タンカト書タ、
定家卿此集遺恨ノ由被申タトソ、（俊頼顕輔清輔等コレヲ今
案セラレタ事カアル、ソウ永ケレト一句〳〵云キレハミシカ
キ程ニ短哥トコ、ヲ云ト釈セラレタト云儀ソ、俊成ハサニコ
ソアラメト大ムネニハ同心ナレト胷中ニハ同心ナキソ）清輔
顕輔ナトハ云キリ〳〵スルト立ラレタ、俊成ハカウモコソト
イハレタ、（俊成此集ヲホシテハシカケルカトソ、万―三首
ナトアラハ不足用、イハンヤ所見ナイホトニソ）色〻ノ釈ニ
サマ〳〵云カ万ニ（長篇ナヲハ）長哥ト云〔或〕ハ雑哥ト云

申テアル、万ニハ一首ト云セツアレト其モ所見ナシトソ、言ツ、ケテ云ホトニト云説モ有ソ、此集ニタ、峯カ一首アル、一首ニテ惣□□□□□アレト其モ□□」見トソ、只ヲホツカナキヲ□□□□□メヲクソ、只ヲホツカナキヲ其理ニシテヲケ、未決ノ事ソ、（長哥ノ奥ニハンカト云テ一首ツヽ加ル事カアルソ、崇徳ノ御時モサアリタソ、万―ニハ卅一字ノ哥ヲハ短哥コト〳〵クカケタソ、此集ノ内忠峯カ三首アル必卅一字ノアルヘキトソ、タトヘハ経ニ偈ト云カ如巻ヲキリテアルホトニサヤウニハシアルカ、コレニ倣ハシ短哥トハシ云タカ、云セツカ一アルソ、又長哥ヲヨミハテン時必末ハ卅一字ノ哥ニイツレモナル程ニ倣之ハシ短哥ト云カト云セツ又一アルソ、コレモ了見ノ義ソ、定家ノ心ニハイツレモアタラヌホトニ□□□□アリツラヌソ、サレト当―ニハヲホツカナキヲ以テ心トスルソ、短哥ハミナノ事ソ、不限一首）

あふことの……（1001）

もえつゝとはに　トハノハニコルソ　たゆる時なく　人ヲ恨ン

トハテ、ソ

カクナワト云モノハ油物ノヤウナミタレタ物ソ、食物ソ、此哥ハ下ヲ引ヲコシアルイハ枕詞色ゝニヨム物ソ

惣ハ恋ノ哥ソ、サレト題不知読人シラストカケタ面白、雑哥ノハシナルホト如此書タソ、長哥ハ上ヲ引下ヲ、コシアルイハ枕詞アルイハエンノ詞ヲ以テヨムモノソ、ワタツミヨリ又枕詞ソ、行水又同事ソ

けなはけぬへくト云ソ……（我恋ニセメラレタソ）

えふの身ノ事御抄ニ色〻ニ書タソ、是モハウホツノ事ナレト基俊ト云人ノイハレタトソ云捨テヲカレタソ、色ニイテハ人カシランスル程ニ、ケナハケヌヘクカ二所ニアレ共恋ノ切ナ時ハイクタヒモアルソ、春霞ハツヽキハセヌソ、ヨソト云ン為ソ、ハテカ哥一首ソ、モシコ□ヲタレカトハ了見シテミタ事マテソ

エンフノ身ナレハヲエフノ身ナレハト書心ハ人界ハ思ハシトヲモヘト尚ヤマスト、センスヘナミハセウスル事カナイソ、消ヨカシト思ヘハ猶ナケカルヽトソ

ふる哥たてまつりし時

此集撰ハル、時古人ノ哥メシケル時ノ事ソ、（目録ト云ハチトヨミ入タホトニソ、ソノト云ハ序ソ、此内ニ次第カチトツ、見ユルソ）」

ちはやふる神の御代より……（1002）（此集ヲ建立セン為ニ言ソ、

アマヒコハヲト云ン為ソ、ミタレカハシキホトニ云ソ）

世、にに(ママ)も哥ノコトソ、霞ハ春ノ事、五月雨ハ夏ノ部ソ、（ト、ロハホト、キスノナリ(ママ)ヲ云ソ、立田山ノカ秋ソ、末冬ソ、ハタレハ大雪テハナイ、木草ノ葉モナヒク斗ノ事カ）ネサメテカラトハツ、カヌソ、猶キヘ帰リ年コトニハ年々ノ事ソ、アカスシテ……（千代ニト思カ賀ノ心、フジノネ恋、ワカル、ハ離別ノ事、藤衣トハ一二見ネハアシキソ）藤衣トハ哀傷へ行ソ、ヤチ草トハ雑ノ部ソ、巻々ハ次第ヲ建立シタ事ソ……、（衣ヲ、レハ心カ色、シンラウナ、ソノ如ク此集ノエ〔ラ〕ヒタルヤウナカ同トソ）コレヲ何トカナトスレト（思アヘスハ）我情カ短慮ナソ、思アヘスソ、如此スル程ニ（サルニヨテ）年ヲフルソ、大宮ハ古今ハ内裏ノ侍従テンニテ撰ノ由申、（ツカフトテハ仕ル事ソ）サモコソコレ撰ヲモ仕ル道ソ、忍草ハチト述懐ノ事ソ、モリヤシヌラムハ我宿ノ事ナレト此集ニモレヤシヌラムトソ、コレハ猶用心ソ、（禁中ニコウシテ我宿ノアレ行ヲモシラヌトソ、モリヤシヌラムハ如此仕レトモル、事アランスラントソ）

一ふる哥に

前ト同時ソ、（古哥ハ此時古人ノ哥集ル儀ソ）

くれ竹の（1003）

世〻ノフル事ナクハ思フ事ヲ（ノハヘマシトハ）ナクサメマシトソ、世〻ハ神代ヲモサセト文武ノ御事ソ、下ナカ□□□人丸ノ事ソ、末ノ世ノ今ニ至マテソ、君臣合躰□□□□□ト、ナシハ此集ノ事（今モ仰ノクタレルハトハ此集ノ時ノ事ソ）」けたもの〻雲にほえけむ□□□□□ノ事ソ、クスリノウスキネナトニツイテアルヲクラフ鶏犬ノ仙ニナリタヤウニ我モ下ナカラ此道ニ依テノホリテアルトソ、（ワレハ不及道ナレト人丸ノ力ニヒカレテ此集ノ撰者ニ加ルトソ）チ、ノ情モトハ何ヨリモウレシキトソ、（カクアレトモヨリチト述懐ソ、テル光ハ天子御事ソ）チカキマモリノ身ナリシヲト云ハ左近ノ番長テアリテアリシヲトソ、チカキマモリハ近衛司ソ、タレカハ秋ノハ右衛門府生ニナリテアルソ、（エモンハ右ソ）大内ヨリ西ソ、左衛門ハ東大内ノ外ソ、官ハアカリタカウレシケレト君ノマモリノチカキカ遠クナリタトソ、アサムキハ嘲ノ事ソ、ワカ方カタフラカシ（出タ）タトソ、新勅撰ニ（六位ノ）蔵人ヲサリテ五位ニナリタルヲイカ、トヲモフトアル時（年ヘタル雲井ハナレテアシタツノ）イカナル沢ニスマントスラント云カ如官ヲアカルハウレシケレト君ノ御尋ノ時ハ如

此云ソ、ヲサ〳〵シクハ長タトモヲモハス、近衛ハ内ナホトニソ、野山ハ君ニ遠クナリタルト云ン為ソ、四季ヲ云テカヤウノクルシミニセメラル、トソ、五ノ六ハ奉公卅年トソ、（君ニ遠サカレハカ、ルクルシミカアルトソ）ヤヨケレハハ（ヨキリスクル事、ヒツキヤウハヤキ事ソ）早過老タルソ、我身ハイヤシクテトソ、（年ハタケタトソ）浪ノシハニヤイタツラニ我キヘシト云事ソ、越ノ国ナル白山モカシラハ」白クト云ン為ソ……、クスリモカノカハ哉ソ、君カ八千代ヲワカ（ヨハイモカナ、ナカラヘツ、）年ヲヘツ、見ントソ

一君か代に相坂山のいはし水こかくれたりとおもひける哉（1004）

是ハ長哥ノ奥ニ反哥ト云ソ、此撰者ニ我ナリタル事ヲメクミヲタウトカリテ如此云ソ、木陰タリト思サフラヒケルクセ事ト謝シ申タソ、（木陰タリト始ハ思タレハ如此アルト、此撰者ニナリタル事ヲ喜ソ、ハン哥ト云、ヘン哥トハ不言ソ）

一ちはやふる……（1005）

玉ノヲトイテ（乱スヤウナトソ）アラレト云ン為ソ、義ナシ、面白マテソ、（落着ハ述懐ノ事ソ）

一七条ノ后ノ宮……（1006）

宮ノ内ハキサイノ宮ノ内ノ事ソ、伊勢カ尼ニナリタルニテハナイソ、舟云ン為ソ、（承平ノ御門マテアリタレハソ）ワレラトチノ事ソ、我等カ中ノ宮女（タチノヲホクノ事ヲ云）ノナリソ、ヲノカチリ〳〵ハ早限コソアレ思ヒ〳〵立出タルナリソ、ナキワタルハ宮女ノ事、此宮ニモ何カアランスルホトヲ此宮ヲモ余所ニコソ見メトソ、（空ヲマネカハハ天ニアフキテト云心）

一旋頭哥ハカシラニメクル心□□〔シ〕メニカヘルト云心トソ、コレヲ」当時サル方此カミニ帰ルト、又□□□カヘルト被仰タ、更ニ不謂、只六句アル物カ、只ハシメヘカヘルマテソ、モノマウスノ下ヘ行ヤウニナリタホトニメクルマテソ、此哥ハ春ノ野ニ梅カ白サイタ花ヲ梅トハシレトキイナトソ、（五句七句ノ間ニ一句マシタ物ソ）

一うちわたすをちかた人に物申それそこにしろくさけるは何の花そも（1007）

ウチワタスヲチ方人ハクカイノサマソ、白梅トハミテアレタ、大方ノヤウニハナイホトニ何ノ花ソト云五文字ヘ可行ヲ又七文字ニカヘル、コ、ヲハシメニカヘル、カシラニメクルト云ソ

一春されは野へにまつさく見れとあかぬ花まひなしにたゝなの

ふへ(マヽ)き花の名なれや（1008）

（ハルサレハノハスムソ、此花梅ソ）花マイナシハ花モ云ナシニコソテアレ只ナヲサリニナノルヘキ花ノ名テハナイソ、云ナシニ依テアサハカニナルコトモアルトソ、（大方ニハナノルマシキトヲサヘテ云ソ、花ヲ賞シテソ）

顕昭ハ花ニマイナシハテントウシテキクヘキト云ヲ定家ノキラウテ云タソ

一はつ瀬川ふる河のへに二本ある杣年をへて又もあひ見ん二もと有楫（1009）

コレモ理ハ恋カ朋友カニテコソアレ聞ヘタソ、年ヲヘテ又モ相見ムトソ

一君かさす御笠の山の紅葉丶の色神無月しくれの雨のそめるなりけり（1010）」

モミチハノ色神ナ月ハアシキソ、色トキリテ神ナ月ソ、（君カサスト心得ヨ、カサストハアシキソ、一二句序、時ハ十月ソ）

一誹諧哥

ハイカイト云事ハ無上ノ大事ナ事ソ、ハイハソシル、カイハ字クムカ和也、合也、調也トソ、合ハカナウ心ソ、皆誹諧ハ利口躰ノ事ソトナレト此集ノハサモアルマシキトソ、ソシルト思ヘハソレカ和ニナルソ、正道ニ非スシテ道ニ叶、先哥ノヤウカ如此ナカハイカイテアルトシレハヨキ哥ヲ知ソ、サレハアシキ哥ナレトコト物ヲハヨクシナスソ、是ヲ史記ニ（滑稽段ト云アル、ソレカカヤウノ事カアルトソ）光武ノ時東方朔カセイノヒキイヲ喜テ雨ニヲソウアタルト云ヲ聞テ雨ニ諸勢ヲアテラレサシタルトソ、（彼東方ハ仙ソ、度〻出テ世ノ政ヲタスケタモノソ）

他家ノセツ、モノヨク云人アラヌ事ヲケウカリテ□□(面白カ)事ヲ云トソ、当―心ハ道ニアラスシテ道ヲヲシヘ非正道シテ正道ニス丶ムトソ、正ノ字ヲサス事ハ雅ハ正也ト云、其ヨリ云ソ、他リウノセツノヤウニハナイソ

一梅の花見にこそきつれうくひ□□人く〳〵といとひしもおる（1011）」

梅ノ花ヲコソ見ニ来タ□□□スニハイロハヌ物ヲトソ、イトヒシモノシモハテニハ□□サレト時シモナト云ヨリハアサキソ、裏―是ハ世上ニ我思事ヲハイハテ或ハ人ヲ思或ハ人ヲニクミナトスルカアシキ事ソ、更ニウクヒス故ニハ綺ヌヤウニ人ヲモイロハヌ物ヲトカク思事カアシキソ、只思事ヲハイヘ

トソ、只云事ハサレコトノヤウナレト人ノ為ニハヨキソ、人ノ精ヲ持タハ如此シタヲモ持トソ、カウ云ヲシヘソ

トヒナキヲキケハ人ク〳〵ト云ヤウナソ

一山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへす口なしにして（1012）

山フキノサイタヲ只黄衣ニ似タホトニ花色衣ト云、又只ノ黄衣ヲモ云、イツレニテモアレソ、此内山吹ヲサシテ云タト云カ面白ソ、コレハ世上ニ人ノ物ヲ（クチサカナウ）云タカルヲ山吹ノ物イハヌ色ヲヨクミテ覚悟ヲヨクセヨトノヲシヘソ、顔回終日不物言トコソイヘトソ

一いくはくの田をつくれはかほと、きすしての田をさを朝な〳〵よふ（1013）

ホト、キスノ田ツクル事ハナケレト田作時分クレハシテノ」タヲサト云、（別名ソ、何トテ云ソナレハ此鳥ハシテノ山ニ住物ナルカ田作時キテナクホトニ云ソ）ホト、キスト云ハ則其名ナルヲシテノ田長トハ時鳥ノ別名ソ、然ニホト、キス〳〵トナケハイクハクノ田ヲツクレハサヌミ田ヲサヲヨフトソ、コ、ハ公界ソ、裏―コレヲハ政ヲツカサトリテアルヤウナモノカ物ヲシナサテイタツラニアレハ世ノ為人ノ為アシキホトニサヤウノ人ヲ是ニタトヘタソ

我名ヲワレトヨフソ、エセヌ事ヲ上表ハセテ何トカナシテセウ〳〵トスルヤウナソ、役ニナラヌ事ナラハ早、身ヲ退ソ、行蔵ノ二ヲヨクヲモヘトソ、トシミヨリヲコルソ

一いつしかとまたく心をはきにあけて天のかはらをけふやわたらん（1014）

マタク心ハ待心ト云ヲ足ヲハタクル心ニトリテハキニアケテハカリアケテ必アスノ夜アハン物ヲモタヘテカリアケテワタルソ、是ヲ人ノ短慮ノ事ニトルソ、一定ナラン事ヲ如此スレハナルヘキ事カナラヌ、ソレニコレヲトルソ、堪忍セテ不叶事ヲシラセン為ソ

急ニ進ナラムトスレハ不達ノ心ソ

一むつこともまたつきなくにあけぬめりいつらは秋のなかしてふよは（1015）

秋ノ夜ト云ハドリヤト云（ママ）、面ハ聞タソ、是ハウレシキ事ノアル時尚喜ヲ重ントスル人ノキニトルソ、少欲知足トヲモヘトノ理ソ

イツラハ秋ノカハイカイソ

一秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時（1016）

秋ノ野ト云物ハ久シ□□□キモノソ、サノミカサリテ」無益、

只今野風シクレセ□□花モ一時テ御入候ヘキソト云タ哥ソ、
裏―（人間六十年ノ習ハア□□□□□□ヲ、キタモノソ）
世上ニ只イカ□ウツクシキ物モ秋ノ野ニ立ル女郎花ノ霜ヲ待
風ヲ待タル身ソ、サヌミ身ヲカサルハイハレヌト云ヲシヘソ
一秋くれはのへにたはるゝ女郎花いつれの人かつまて見るへき
（1017）
タハル、ハ妙ナ（色コノミナ）躰ソ、人ノ身ヲツメリテ見ツ
ナトスルサレ事ニヨソヘテヨミタ哥ソ、裏―定心モナイヤウ
ナ人ノカウサウノ人ノ所ヘ立寄テハ思モノモア、タノミカタ
ナイト思モノモ御チヤヲスル、サレハ主ヲモ云身ヲモ損スル
心ソ、（ツヰセウナシソトソ）
一秋霧のはれてくもれは女郎花はなの姿そ見えかくれする（1018）
キリハ不定ナ物ナホトニ見セツカクレツシタ見ヘタサマソ、
コ、カハイカイソ、裏―世上ニハ又秋霧ノ内ノ女郎花ノヤウ
ニチヤツトケスラウツカクレツスルヤウニアルモノカアル、
能見定テ云ヨレトソ
　皆女郎ハ女人ノサマニトルソ
一花と見ておらむとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有
けれ（1019）
ウタ、ハアマリナト云ヤウナサマソ、大方ノ花ト見テヲラム
トスレハ女ト云名カアルトテヲラヌ出家ノ」ヨメル哥カトソ、
裏―コレハ又出家ノ身ナトニテ女ト云名カアルト云テヲクモ
二乗ノ見ニ落タ物ソ
一秋風にほころひぬらしふちはかまつゝりさせてふきり〳〵す
なく（1020）
サセト云モ虫ノナソ、ホコロヒテハシアルカツ、リサセトテ
ムシノナクトソ、裏―不及道ヲカマヘテトリカ、リテハイカ、
ソ、能遠慮セヨトソ
　ツ、リモサセ虫ソ、コ、ラハイカイ
一冬なから春のとなりのちかけれはなかゝきよりそ花はちりけ
る（1021）
面ハ義ナシ、中カキカラ花チルト云カハイカイノ心ソ、裏―
何事モ一事ハテ、又ノ事カアルカ（ヲハシムルカ）ヨキソ、
人ノ物語ナトスル中ハ我事ヲ云出シツナトモセヌカヨシトソ、
只次第〳〵ヲヨクミヨトソ
一礒の神ふりにしこひの神さひてたゝるに我はいそねかねつる
（1022）
イソネカネツルハ其ヲコタリヲエセヌ事ソ、レン〳〵ノ恋ノ

ヲコタリモセウスヤウカナイトソ、裏—悪事ナトヲ人ノ思立〳〵シテ是ハ少悪〳〵トヲモヘトツモリ〳〵スレハ□ツモル時〔ヲ〕ホセラレヌ物ソトヲモヘトソ、少罪ヲカロンシテ□□□□スルナカレ、一滴モタヘサレハ大器□ソ

タ、ルト云ハナヲサリノ事テアルヲコソ、サレハタ、ルソ、イソネカネツルハソノヲコタリヲエセ□□ソ」

一枕よりあとよりこひのせめ□□□せむかたなみそとこなかに□□（1023）

義ナシ、恋ヲ裏ハ欲心ニトリ〔枕〕ヲハ善ニトル、アトヲハ悪ニトルソ、善ヲタニツヨキヲハアシキニトル、イハンヤ欲ヲ左右ヲ見ヌホトニツヰニワカ身ヲ没セテ不叶ソ

一恋しきか方もかたこそありときけたてれをれ共なき心ちかな（1024）

此恋シキカノカ濁ソ、恋ニホレツレハ我立テヲレ共始ヨリ乱来タホトニ其始ヲ不知ソ、是ヲ欲心ナモノカ其欲ノ落着所ヲ定ヲイテコソソコヲハウスルホトニ弥我身ヲイタツラニスルトソ

何ト恋ト云モノモアタル心カアリテコソアウカトハセフトソ、一条殿ハカタハ方ニハ不被仰、カタチニ被仰タソ

一ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてそ恋しき（1025）

人カアヒ見テモ不苦カト思テ居タソ、心ミカ足ヌソ、アリヌヤトハカウテモアリヌヤト思テ居タソ、ケクツヨク恋シキソ、タハフレニクキマテハカハト恋シウナリタソ

侘人□恋シキホト□アフツヘシキ人ニモアハテヰテミタレハコレハ我キノタハフレテコソアレトソ

一み、なしの山のくちなしえてしかな思ひの色の下染にせむ（1026）

此下染ニスルハキナ物ハ下ソメニスル物ナレハソ、如此云ハ人ノ何共イヘ耳ニモ聞不入口ニモ云イテサルヲ」下ソメニシテモチタラハ恋ノ道ニハマヨウマシキヲトソ、裏—人ノ云事ヲキカスイハスセハアシキ心ニハマトウマシキ物ヲトソ

恋シ人ヲキク、ソレカラ恋カ増ルホトニ聞事ヲモキコシトスレハキカヌ同事ナホトニソノ心ヲ□府ノ下ソメニシタ（以下欠）

一足引の山田のそほつをのれさへ我おほしてふうれはしきこと（1027）

ワレヲホシテウハホハ濁ソ、コレハ我ヲ思コト、ソ、山田ノ

僧都ノ事玄賓ヨリ事発ソ、此哥ハイヤシキ物カ我ヲ恋ルヲソレハ只山田ノ僧都ノヤウナ物カ我ヲイトウシイトイハル、ヤウナモノカヨミタソ、ウレハシキハ愁ソ、山田ノ僧都ヲハ田地ト云ヲ富貴ト貧窮トニトル、物ヲタクハヘテウシナハシトシタ愁モ貧ナルモノ物ヲホシカル愁モ同事ソ、只胸中一楽タニアラハタノシミソ

如ハ山田ノソウツノコトクナ者ニソ、又コト、スム時ハソウツニナスラヘタソ

一ふしのねのならぬ思ひにもえはもえ神たにけたぬむなしけふりを（1028）

延徳二十一三

（フシノ）ネノナラヌトツ、クルモ（カツ）ハイカイ、モヘハモヘモトツ、クルモハイカイ、ケリヤウ不叶恋ヲムヤクノ思ニ身ヲモヤスヲ既ニ富士権現□□〔恋〕ノケフリヲハエトメス呪ヤ我ホカトソ、裏―□□□成事ヲマツナラネハト」テ損カアルカ、マツシテ〔見テ〕云モノカスル事ソ、ソレニトルアサマシキ事ソ

一あひ見まくほしはかすなく有なから人につきなみまとひこそすれ（1029）

此哥ハ星ト月トヲヨメルカ、惣ノ心ハ見タイ事ハカス限モナケレト人ニツキカナウテマトウトソ、裏―人ノ智恵ナトモアルニトルソ、其人ニ近付タイト思ヘトナイニトル、サレト其ヲ我思所カヨハキニヨテアハヌソ、其ニコ、ヲタトヘテ見ヨトソ

月星ヲ云入所言言（誹諧）ソ

同三年三十九辰

一人にあはん月のなきには思をきてむねはしり火に心やけけり（ママ）（1030）

月ノナイハ便ノナイソ、月ノ字ヲカルソ、ムネノ内カサハヒテ思ノ火カ急ニナリタルソ、思ヲキテハ思キタリタトソヘタ心ソ、（ムネハシリ火トスムソ）

一春霞たなひく野へのわかなにもなりみてしかな人もつむやと（1031）

我ヲツント大切ニスルヤトソ、愛スルヤトソ、裏―コレラハ人ノ役ヤナトヲ持テアルヲソハナ物カ望ノ心有ナハ其役ニテツマル、物ヲ其役ニアタラヌモノカ」望事不謂ソ

一おもへともなをうとまれぬ春かすみかゝらぬ山のあらしと思へは（1032）

人ノ我ニチキリタ物カアソココ、ヘ通不調ナトソ、カヽラヌ山ノアラシトヲモヘハカ誹諧ソ、ヲモヘトモハ思マイラスルナサケハアレト不調ニ御入候ホトニトソ

夏部ニナカナク里ノアマタアレトト同心ソ、底ハ恋カトソ

一春の野のしけき草はのつまこひにとひ立きしのほろゝとそなく（1033）

シケキ草葉ノツマカ誹諧ソ、ホロ、ハホロ〳〵トナクト云義ソ、（草葉ノツマヲキシノツマニナソラヘタソ、ホロ〳〵ウツ事ヲナソラヘタソ）

一秋の野につまなき鹿のとしをへてなそ我恋のかひよとそなく（1034）

ナソトハ年ヲヘテナクハ何ソ無詮恋ノカイヨトナクニテコソアレトソ

ツマカナイ鹿ハ年〻同事テアルニナクハ年〻歳〻妻モナキ所ニナクハ何ソ無詮事ニナクトソ

一せみのはのひとへにうすき夏衣なれはよりなむ物にやはあらぬ（1035）

ウスイ衣ト云物ヲキテナルレハヨルモノニテアルカ何トテ人ノ心ハヨラヌソトソ、（コ、誹諧ソ）夏衣ノナルレハヨルト云カハイカイソ、裏―〔セ〕□ノハノヤウニヒタスラ心カアサイ人ハ真実ニアサイソ、朋友ニ交ルトモ人ノ心ヲヨク」見テ知音セ（ママ）トソ、如此□□キ人ニハ値遇シソトソ

一かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたてしくるないとひそ（1036）

カクレヌハ草ヤナトノ生ル河ヲ（ママ）、ネヌナハ、根ノアルヌナハソ、如此人ノソハヘ行ヲクルヤ〳〵ト云、ソナタトネマイラセヌ物ヲ、ネタト云名ハ立マイラセマイ、来ル斗ナ御厭候ソトソ、裏―（細、人ノクルヲナイトフソ）人〻セイノヨキモノハナイソ、只人ノタンヲタニイハヌ物ニテアラハ知音セヨトソ、朋友ニ大切ソ

上ハ序、カク（ママ）ヌハ上ニ草深クテ水見ヘヌ沼ソ、ネヌナハヲ云ソ、ネヌナハ両ネタト申名ハ立マイラスマイ、コ、ヘマル斗ハ御イトヒ候ソトソ

一ことならは思はすとやはいひはてぬなそ世中の玉たすきなる（1037）

タマタスキナルハカケタト云事ソ、違タト云ニテハナイソ、如此ナラハ、ウトヒ人ソ、何トテサウナラハ云ハテヌソ、玉タスキノヤウニカケテハヲクソトソ、裏―人ノ物ヲ云キルヘ

キ事ヲ云キラヌ、則コレソトソ
カケテヲカンナラハイヤトモ云ハナセカシトソ、サヤウニモイハテカケテヲクソトソ
一おもふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよしもかな（1038）
我ヲ思ト云（程ニマコトカト其人ノムネノ）クマニ（立）カクレテ居其人ノ心ヲ能々見タイトソ、一切人ノ胸中見ヘヌ物ソ、裏―此方ヲ思ト云人カ心ヲ見タイト云モ一ノセツ、又思トイハ、」ウチ任テヲケカシ、見タカリテ用ハト云モ何モ用ニ立ソ、（可依事儀ソ）
一おもへ共思はすとのみいふなれはいなや思はし思ふかひなし（1039）
義ナシ、裏―普通ニハサモソ君臣ノ中ニテ此心ハ努〻アルマシキソ
一我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして（1040）
内心ヲ見レハアナタコナタヒク人カアマタアルト云ソ、コレハヲノツカラ世上ノ理ソ、イヤナ事ソ
大ヌサハヒクテアマタノ哥
一われをおもふ人を思はぬむくひにや我思ふ人の我を思はぬ（1041）
面義ナシ、裏―ムクヒト云モノカ大事ノ事ソ、カマヘテムクヒヲ能ゝ思忘ナトソ
一おもひけん人をそともに思はましまさしやむくひなかりけりやは（1042）
義ナシ、表裏同様、一本〳〵ハ基俊ノ相伝ノ本ニハヨミ人シラステトヲルホトニソ、又アル本ニ如此アルホトニ其モ難捨□□定家ノ入タソ
一いて、ゆかん人をとゝめむよしなき隣（ママ）の方□□なもひぬ□□（1043）」
鼻ヲヒヌト云事ハ善□□□□人カトハ□□□□□ト云事カアルカ、是ハイム□□□□此人カ出テ行ホトニ隣ニモハナヲヒタラハ立帰マシナイヲモセンスルニソレサヘナイトソ、（此ヨミ人不知テトヲレトサル本ニフカヤフトアルホトニ依難捨両所ニ一本〳〵ト書ソ、定家相伝ノ本ハヨミ人シラステトヲルソ）
ヨキ事ニモハナヒヒモトキナト云ソ
一くれなゐにそめし心もたのまれす人をあくにはうつるてふなり（1044）

人ヤナトクレ〳〵心カソミツルカ色深カリシモアクカ入ハ紅ノ色カ、ハルホトニサヤウニ心カ、ハルトソ、アクニテ色カマス事モアリ、又カハル事モアルソ

人カ我ニクレナイノ色ノヤウニ我ニソメシヲモタノマレヌトソ

一いとはるゝ我身は春の駒なれやのかひかてらにはなちすてつ〔る〕（1045）

野カヒカテラハ馬ヲ聊爾ニシタ事ソ、恋ノ哥ソ、（俗ニ）野捨ニシタナト云心ソ

一うくひすのこその宿りのふるすとや我には人のつれなかるらん（1046）

（ウクヒスノコソノヤトリハ）フルスト云ン為ニウクヒスヲトリ出タソ、如此云ハ我ニ□□ナカリシ人カ俄ニツレナウナリタホトニソワレヲフルスヘキ為ソトソ

一さかしらに夏は人まねさゝのはのさやく霜夜をわかひとりぬる（1047）

サカシラ（ニ）ハカシコシ（タテ）トソ、夏ハ人マネハ世上ノ思事モ」ヒトリネヲスルホトニカシコタテ、人ニステラレテ有事ヲ忍テカシコタテ、如此シタ、サ、ノ葉ハ霜云ン為、ソレハ又冬云ン為、サテ冬ニナリテヒトリネテカナシミヲアラハスカ、シタテノアシキ事ソ

アハンスル人モアレト人マネヲシテヒトリヌルト云カヲ、シタソ、冬マヘノ利口カアラハレテマコトニカナシクナリタルソ

一あふことの今ははつかになりぬれは夜ふかゝらては月なかりけり（1048）

此作者平中木、アルイハナカトカヲニコル、廿日ノ月ハヨイニハナイ物ソ、サヤウニ我チキリモハツカニナレハアカ月方ナトニクルトソ、サレハ又タヨリナイトソ

人遠サカリハテ、アルソ、廿日ノ月ノヤウニトウモ夜深テナラテハコヌト云心ソ

一もろこしのよしの、山に籠共をくれんと思我ならなくに（1049）

此左ノヲホヒマウチキニ（ママ）ハ枇杷ノ左大臣ソ、当官カ、コレハ伊勢カ仲平トチキリシカチトカレ方ニナリタル時父カ大和守カ所へ行テ三輪ノ山ノ哥ヨメル返シニヨメルカ、ハイカイニナル時ハ相伝ソ、其故ハ吉野ハマツ人ノ身ヲ隠ス所ソ、サレハモロコシノトコ、ニナイ物ヲ云タ所カハイカイソ

アマリ云ントテモロコシノ吉ノト云ソ、カウ云所ハイカイ

ソ、努〻モロコシノヨシノト云事ハナイソ

一雲はれぬあさまの山のあさましや人の心をみてこそやまめ（1050）

ハレヌト云ハケフリソ、山□アサマシヤト云ハ我思ノ」ハテモ此山ノヤウニコソヤケ□〔ラ〕メ、アサマシヤ、カウアレト何トシテサシハヨクヘキソ、人ノ心ヲ見ハテ、コソヤム共ヤマメトソ、（アサマシヤナトノワタリハイカヒソ）

一難波なるなからのはしもつくるなり今は我身を何にたとへん（1051）

ナカラノ橋モツクルハ序ノ時作ル、コ、ハ尽ルソ、コ、カハイカイソ

一まめなれとなにそはよけくかるかやのみたれてあれとあしけくもなし（1052）

カルカヤト云ハミタル、ノ序ソ、マメナレトハ実ソ、ナカ実ノナイ物モアリ、又乱サウナ物カ実ノアルモノモアルト云事ソ

実ナモノモ又アシキ所カアルヲ何ソハヨケクト云ソ、カルカヤハ枕詞、ミタレテアレトハアシキヤウナレト又クルシカラヌ事モアルトソ

一何かその名の立事のおしからむしりて迷は我ひとりかは（1053）

如此思情カマコトノ迷ソ、裏ーキヲハ可直ト思ニコソアレ我ヒトリアシキ者カアルカト云ハイツヨリハナルヘキソ、是モ恋ノ哥ソ

一余所なから我身にいとのよるといへはたゝいつはりにすく計也（1054）

クソトシヤウヲヨク云へ、イトハイトコ云ン為ソ、偽ニスクルハカリハ糸ヲ針ニスクルト立入タマテソ、」コ、ハイカイソ

一ねきことをさのみきゝけむやしろこそはてはなけきのもりとなるらめ（1055）

ネキト云ハ神ニ（物）マウス事ハカリニテハナイソ、人ニ物ヲ云コトヲモ云ソ、アレカ云事ヲモコレカ云事ヲモキ、〳〵スル女ニソレカハテハナケキニナルトソ、神ニネキ事ヨリ人ヲ社ニナイテ云タソ

一なけ木こる山としたかくなりぬれはつらつゑのみそまつゝかれける（1056）

山トシ高ト云ニ（二ノ心アル）年序ヲフル事ヲモイヘトコレハ我思カツモリ〳〵スルホトニ山トナリタルソ、シハヤスメ字ソ、如此山トナリタレハツラツエノミソハ木コリノ杖ニソ

ヘテ云ソ
我思カ歎コル山ト高ナリヌレハトソ、シハ常ノ事、コ、ハ
年序ノ事ニテ□ナイソ
一なけきをはこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬへら也
(1057)
一二句ハイカイソ、何ニテモ無用ノ事ヲコリツミ〳〵シテ思
コトハカヒナイ事ソ
一人こふる事ををもにとになひもてあふこなきこそ侘しかりけ
れ(1058)
恋〳〵テモカヒナイソ、アフコヲソト立入タソ、面ノ理ハ逢
期□□(以下欠)」
一夜ひのまにいて、入ぬる□□□□□□□物思□比□□有か□
(1059)
上ハ序、(三カ月ハ)ワレテ物思ハ我人カ別々ニナリタルソ、
(又ワリナウ物思比ト二ノ心ソ)
一そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさ
きるさに(1060)
世上カ何トヤラン定ヌホトニ、ソヘニトテハカウセウトスレ
ハ違ヒ又カウセントスルモチカウ時ニアナクヒシラスヤ、サ
テハシウワウナソ、アウサキルサハ行サマクルサマニナレ共
コ、ハ只シウワウソ
我心ヲ一ヲムクウニシタ哥ソ、ソヘニハ我心ニ理ヲツケタ
詞ソ、云シラスハ言語道断ノ心ソ
一世の中のうきたひことに身をなけは深き谷こそあさくなりな
め(1061)
世上ニ歎スルモノ、多心世上ノ風ノ哥ソ
世間ハウヒナイモノハナイト世ヲ風シタ哥ソ
一世のなかはいかにくるしと思ふらむこゝらの人にうらみらる
れは(1062)
更ニ世ノトカニテハナイヲ如此人ニ恨ラル、ト云ソ
世中殿ハイカニクルシク思給ランソ
一何をして身のいたつらにおいぬらん年の思はむ事そやさしき
(1063)
ヤサシキハハツカシキトソ、徒ニ過モテ来テ年ノ思ン事ソナ
トハイカイソ、(サテハ我ヲ何ヲシテコレマテ老タソト云ン
トノ心)
一身は捨つ心をたにもはふらさし終にはいかゝなるとしるへく
(1064)

ステツト云ハマツシクモナリ不運ナ事ヤナトカアル」身カ、我事ハ無力、ハウラサシハハウラツサセシ、心一ニテ落居ヲモ見ントソ

ツキニハ何トサテ人ハナルモノソト思テ心ヲスツナトソ

一白雪のともにわか身はふりぬれと心はきえぬ物にそ有ける（1065）

雪ハフリヌル云ン為ソ、年ヨリタレト心ヲ立ル人ハサハナイソ、裏―人ハ消ルモノナレ共マコトニ金剛不壊ノ法心ナルホトニトソ、身モ心モ五色ノカタチモナイ物ニテアルホトニトソ、コレハサイ家ノ心ソ

我身ハフリタレト心ニハ人ニハヲトルマシケレトナト思タソ、心ハキヘヌハ心ニヲチタト云心ソ

一梅花さきての後の身なれはやすき物とのみ人のいふらん（1066）

スイト云物ニヨソヘタソ、逸物カヤウナ物ヲソヘテヨメルカ、此裏カ面白ソ、花カ落実カナルモノナレト人ハ実ホトヨキ事ハナケレ共花カナケレハ人カマユヲヒソムル程ニ花実相対ナクテハ世ヲハワタルマシキトソ

一わひしらにましらな鳴そ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ（1067）

法皇ハ宇多ノ御門ノ事ソ、今日ノ御幸ノカヒアルニワヒテナ啼ソトソ、世界ノ風ナレト昔カラ風トハイハヌ事ソ、今日ノ御〔幸〕目出ケレ共世間ニハ侘ル」モノカイクラモアルトソ、此行幸ヲ風シタ哥ソ

一世をいとひこのもとことにたちよりてうつふしそめのあさのきぬ也（1068）

ウツフシノフヲスムソ、ニコルモアルソ、黒クソメタ物ソ、是ハソメタマテハナイ、ウツフシテ世上ウチ観シテ居哥ソ、此哥ヲ誹諧ノハテニヲク心ハ人ト云モノハ一生トヤカウヤシテ居ハテハ木ノ本住ナトシテ居タカヤキソト云心ソ、縦山中ニ入事ナク共此心ヲハモテトソ、此雑躰ノ内長哥四首旋頭哥六首誹諧六十首ニ及所ハ世上ノ理ニケウクンスルホトニ如何ニモ如此アレトヲシヘント云為ニ始ニ非正道扶正道ト云心ニテアルホトニ如此云ソ

ハイカイ五十八首ソ

此次ニ十巻ヲヨメルソ、如此ノ事モ口伝ソ」

同三年三廿辰　延徳二十一九

古今和歌集巻第十

物名（此巻ヲ第十ニヲク事シヤウクハンノ儀ソ、先三ケノ大事此巻ニアルソ、裏ノセツヲ本トスルソ）

物ノ名ト云事カ、物ト云字ニツキテ一切日本記ニモ人物ト云テ、物アリ天地ニサイタツ、形ナウシテ元セキレウ、能万像ヲシテ主タリ、ツキニ四時ニシホマス、（以此シユヲ物ト云部ヲヲクソ）此物ト云事ハ本来ノ面目ト云、コレカ古今ノ古ニアタル、カリニツケタ字ソ、父母未生前……日本記有物形如葦芽云、此物ト云字ヨリ元本カラ発ス、フクムルマテハ母カセルノミ、入ル、事ハ我スル所ソ、タトヘハ此物ノ部ハハカリ事ノ段ソ、ウクヒス時鳥ト云テ（哥ニ）其名ハ不見ソ、其物ニ非スシテ其道ヲ扶クル事カアルモノニテアルホトニソ、只ハカリ事ノ段ソ

一心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん（422）

コレハウクヒスソ、鳥ノナクラムノ鳥ハ何トリニテモアレウ、ヒヌト我トナイタトヘソ、ソヲチツ、ハツヨクヌレタソ、ソウチト云方モアルソ、（□□□落トヨムソ）

鳥ハ何ニテモアレクカイノ□□ソ

一くへきほとときすきぬれや□ち侘てなくなる声の人をとよむる（423）

コレハ恋ノ哥ソ、人ヲ待ワヒテソ、コレハクヘキ時カ過テアルトナクホトニ其声カ傍人ヲ驚カスソ

トヨムルト云、ドヨムト云義ソ、驚ノ心ソ（ママ）

一浪のうつせみれは玉そみたれけるひろは、袖にはかなからむや（424）

拾ハ、袖ニハ玉ノ事ソ、裏―ヒロウト云所ニツケタソ、（タトヒ）誠ノ宝珠ナリ共トルマシキ事ヲハトラシトソ

浪ノウツ瀬ヲミレハ誠ノ白浪カ玉ノヤウナレト、ソ

一たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし（425）

袖ニハカナイト云ヨリ発ソ、コレコソソレヨト玉ヲ袖ヨリウツセカシ、見ンスルトソ

同時同様ニヨメハ後ニイテキタホトニコソアレ、返シノヤウニハ見ヘヌ哥ハ袖ノ玉ヲウチウツセノ心、裏―玉ヲ持ナカラナシトナ云ソ

一あなうめにつねなるへくも見えぬかなこひしかるへきかはに

ほひつゝ（426）

是ハ花ナトノ其跡ニ後ニワスレマシキナト云タヤウナ心ソ、アナウメニト目ヲキルソ、後ニ此匂ヲ思出スル心ソ、裏―人ノミメ形ナトハヨキ様ナカ実ナ所カナイヲ歎ソ、我モ形ハカリソ、心ヲ常住ニ可持事ソ、人モ又サヤウノ所ヲ見テトンスマシキ事ソ

アナウトキリテ又目ニトソ

一かつけ共浪のなかにはさくられてかせふくことにうきしつむ玉（427）」

カニハサクラトハカハサクラノ事ソ、浪ノツフ〳〵トスルカ玉ニ似タソ、カツケハ上ヘツフ〳〵ト玉カアカリタソ、コレヲ裏ニ詞ニハ花ヲカサレ共底ニハ何モ実ニナイ人カアル、ソレニ可思ト云ヲヲ（ママ）シヘソ

サクラレテトニコルソ、心底ノ不実ヲイマシムルヲシヘソ

一今いくか春しなけれはうくひすもものはなかめて思ふへらなり（428）

花ノアトナトニウクヒスノナイタサマソ、物ハナカメテハ只ウチナカメタサマソ

花モチリ春モ暮方ニナリテウクヒスモ物カナシクナクホトニ我心ニテアレヲサツシタソ

一あふからも物は猶こそかなしけれわかれん事をかねて思へは（429）

義ナシ、裏―会者定離ノ苦ナイモノハナイソトソ

一あし引の山立はなれ行雲のやとり定めぬ世にこそ有けれ（430）

ナソラヘ哥ソ、裏マテモ如此ソ

序哥ソ

一御吉野のよしのゝたきにうかひいつるあわをか玉のきゆとみつらん（431）

ヲカ玉ノ木三ケノ大事ノ一ソ、真実ハ淡ニテアリツルヲ玉トワカ見テアリケルカトソ

□□□玉カサツトアハカ□□タヲ玉トミタレハ消タヲマサニ玉カアリツルカ、アハヲハシ玉トミツルカトソ

一秋はき（ママ）のいまやまかきのきり〳〵すよな〳〵なかむ風のさむさに（432）

山カキハチイサクナル□ソ、義ハ明ソ」

一かく斗あふ日のまれにな□□□いかゝつらしと思はさるへき（433）

アウヒト云モイカ、、恋ノ哥ソ、（アヲイヲタチ入ル、ホトニアフ日ト云ソ）

一人□ゆへのちにあふひのはるけくはわかつらき(ママ)や思なされん（434）

コレモ恋ノ哥ソ、人目カシケキニヨテコナタカアハスハワカツラキニヤアヒテハ思ナサレムトソ

□目ユヘニテアルヲ心トヤ思ハレントソ、裏一人目ヲモトヽシテ、我ナス事ヲトヽケスハ天道ハ其アヤマチヲ我アヤマチトセウスルトソ、首尾チカハヽソ

一ちりぬれは後はあくたになる花を思ひしらすもまとふてふかな（435）

クタニ苦カ、牡丹ノツレソ、蝶カ花ニタハフレタソ、是ハ一切人ノ色ニハウスル三昧ソ、貪心ヲ失心モテトソ、如何ナル金銀モ後ハアクタソ、（花ハ心ノツクモノソ、コレハ裏ノセツヲトクイヘ、ナソニナレハ花ノ上面目ヲウシナウホトニソ）

苦丹ソ、ホタンノツレソ

一われはけさうひにそみつる花の色をあたなる物といふへかりける(ママ)（436）

仮令夜ノ間ニサイタヤウナ花ソ、是モ相違ノ事ニテハナイソ、春ノ花ノ事ソ、上下云ツヽケニクキソ、サキソメタ花ヲ見テ貪シツルカ思カヘシテアタナト花ノ上ヲモ云我情ヲモ如此云ソ

ハツ花ノメツラシクサイタヲ面白ト驚セイヲチヤツトハカナヤ、アタナルモノトコソ云ヘケレト思返シタソ

一白露を玉にぬくとやさゝかにの花にもはにもいとをみなへし（437）

ヲミナヘシナレトメシトヨムソ、花ノ上ノサヽカニノ糸ニ夏ノアルヲ見テヨミタソ

一朝露をわけそほちつゝはなみむと今その山をみなへしりぬる（438）

今ソノ山ヲヨクヘアリキテ花ヲ見タル躰ソ、（其山ヲクハシクシリタトソ）

一をくらやまみねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人そなき（439）

朱雀ハ寛平ノ御事、如此立入テヨム人モアリ、又句ノ上ニヲキテヨミテアル人モアリ、イツヨリ如此面白鹿ノナクソト云タホトニ面白哥ソ

所コソアレ此山ニ面白ナイタレハイツヨリカヽルチキリハ

アリケルソト也

一あきちかうのは成にけり白露のをける草はも色かはり行（440）

キ、ヤウノ事義ナシ、是ハ君臣ノ間ナトニ詞ノ花ヲカサリ人ヲ掠世ヲ掠シツルカ潮時至如此アルニヨク可思事ソ

物名云ントテソ近キヲチカウトハアシカルヘシ

一ふりはへていさふる郷の花みむとこしをにほひそうつろひにける（441）

シヨニハシヨムソ、是ハ古郷ノ花ヲ見ントテハル〳〵来レハ匂ノウツルト云ハ花ヲ恨心ソ、（裏―人ニ約ヲ堅シタモノ変ヲヤスクスルアシキトノ心ソ）

フリハヘハウチハヘ、□□サトノ心ソ

一我宿の花ふみしたくとりうたんのはなけれはやこゝにしもく□（442）

リウタンノ花ハリ□□□ノ事ソ、哥ハ野カナイ物ノ」ヤウニコ、ヘクルト□□□□□カ多所ニヰヨカシ、人ノ□トウ所ヘクルソトソ、裏―イツクテモ事ヲナサウスル物カ人ヲ妨テ事ヲナス事カアル、必人カイトウ物ソト心得ヨトソ

一ありと見て頼むそかたきうつせみのよをはなしとや思なしてむ（443）

代ヲハイクラモ千秋万歳ト思物ナホトニ、タノムソカタキハタノムソタノミカタキトソ

一うちつけにこしとや花の色をみむをく白露のそむる斗を（444）

ケニコシハケンコシノ事ソ、哥ハ白露カカリニソメタルヲヤカテコレトヤ見トソ、義ハ明ナソ

花ノ色ヲヤカテコイナント、ハ思マシキソ、目ニハ偽カアルモノソ、裏モ心得ヨ

一花の木にあらさらめとも咲にけりふりにしこのみなる時もかな（445）

メトニケツリ花サセル三ケノ一ソ、コレハケツル花ノ事ヲ（ナソラヘテ）ヨメルソ、述懐ノ哥ソ、ナルマシキヤウナ物カ（モノニナル時）ヨメルソ、裏―官位ナトニアル事ソ、年ヲツミ其官ナトニナルヘキ人ヲ、イテソハサマノ人ナトノナル事ヲ思ヘトソ」

同三年三廿一午　延徳二十二十

一山たかみつねにあらしのふく里はにほひもあへす花そ散ける（446）

義ハ明ケシ、裏ノセツハ花ヲハ君子（道アル人）ニタトヘテ嵐ト云ハ世上ノ誹諧モノニトリテ道無者ノ下ニハ道有者ハ堪

忍セヌモノナホトニ道アラムモノハハケシキ下ニハナヰソトソ

ハケシキモノモ心アルヘキソ

一ほと、きすみねの雲にやましりにしありとはきけとみるよしもなき（447）

山シ（ト云）ハシノネ山ニアレハ云ソ、哥ハ義ナシ

一うつ蟬のからは木毎にと、むれと玉のゆくゑをみぬそかなしき（448）

カラハキハカラナテシコナト云同事ソ、哥セミノカラハ木コトニアレト玉シヰハイツク共ナシトソ、裏―木ヲハ住所ニ立テ玉ヲハセイシンニシテ如何ニ広所ニモ清キ人カナケレハアルカイモナイホトニタツネテモ〳〵道□者ハアラマホシ、イ□レヲ玉ノ行末ヲ見ヌソカナシキト云□□

玉ノ行末ハ昔ノ道アル人ノタマラヌソカナシキトソ

一うは玉の夢になにかは□□□□□つ、にたにもあかぬ心を（449）」

カハナ草三ケノ大□□□一ソ、哥義ナシ、裏□欲心ノ熾盛ナルヲ□□□見ヨトソ

□□□色はた、一盛こけれとも返々そつゆはそめける（450）

サカリコケ是ヲ三ケノ内ニ入ル、人モアリケナ、当流ニハサハナイソ、タカムコヲタカンコト云一ノセツアルソ、哥一サカリト云ハソトノマナト露ハカヘス〳〵ソメントスレト露ノチカラナキ程ニウスキソ、裏―聊ナル人ノ志ナレ共随分ト思事カアルソ、其ヲカマヘテ思クタサヌヤウニセヨトソ

タ、一サカリ□トコヒヤウナレト（云□）心エハ返〳〵□メタソ

一いのちとて露を頼むにかたけれは物わひしらになくのへの虫（451）

ニカ竹ハ苦竹ソ、哥タノムニタノミカタケレハ虫カ侘テ鳴ソ

虫ノ為ニハ露カ命ナレトタノムニタノミカタケレハ虫カナクソ

一さ夜深てなかはふけ行久方の月ふきかへせ秋の山かせ（452）

哥ハ義ナシ、河辺ノヲモ云、内裏ノヲモ云

中殿ノ竹但河辺ノヲモコ、ニテハ云カソ

一けふりたちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらひと名付そめけん（453）

是ハ常ニ人ノ折ワラヒヲタレカワラヲタク火ト」名付ツラムトソ

〔笑〕トワラノ火トカ、リタソ

一いさゝめに時まつまにそひはへぬる心はせをは人に見えつゝ（454）

イサ、メノサ下ノサヲ濁ルソ、イサ、メハシハシノ事、時待間ハチトタノム事カアルソレヲモタヘテ時剋到来ヲハマタテ心ハセヲハ人ニ見ヘテ思事ハ随意ニナイトソ

ケリヤウ恋チニトリテハ一定セヌ事ヲハアハレト見テケク名ヲタニモ心ハセヨリタテタソ、裏―何事ヲモ成モ不成モ遠慮セヨトソ

一あちきなしなけきなつめそうきことにあひくるみをはすてぬ物から（455）

義明ケシ、（物ノ名共見ヘス、世上ノ理サシツメタ哥ソ）

一浪のをとのけさからことにきこゆるは春のしらへやあらたまるらん（456）

カラコトハ西国カ、此哥モ今朝カラトリワケテトソ、コトヲハチトソヘタソ、義ナシ、春秋ノ調子ソ、必春□調子ニ可合ニテハナケレト今日ナレハ如此云ソ

一かちにあたる浪のしつくを春なれはいかゝさきちる花とみさらん（457）

舟ノカチニ浪ノシツクカマ白タヘニカ、ルヲ時節カ春ナレハイカ、花ト見サ□ントソ

□□□□□ソ

一かのかたにいつからさきに□□□□□□ちは跡も残らさりけり（458）」

アヲノヲスミテヨム（コノ間欠）イツカラサキニカ行ツラムトソ、義明シ、サキ（コノ間欠）ワレヨリサキナト云渡□舟□ノ心ソ

□□シタ舟ノヤウナ事ソ

＊コノ一首ノ注、破損甚シク判読困難

一浪の花おきから咲て散くめり水の春とは風やなるらん（459）

波ノ花カ、奥ツ浪カ、□□ツ〳〵トサキテチリクルハ水ノ春トハ風カミセタトソ

一うは玉のわかくろかみやかはるらんかゝみのかけにふれる白雪（460）

義明シ

一あし引の山へにをれは白雲のいかにせよとかはるゝ時なき（461）

義明シ

アハレナ哥ソ

一夏草の上はしけれるぬま水の行かたのなき我心かな（462）

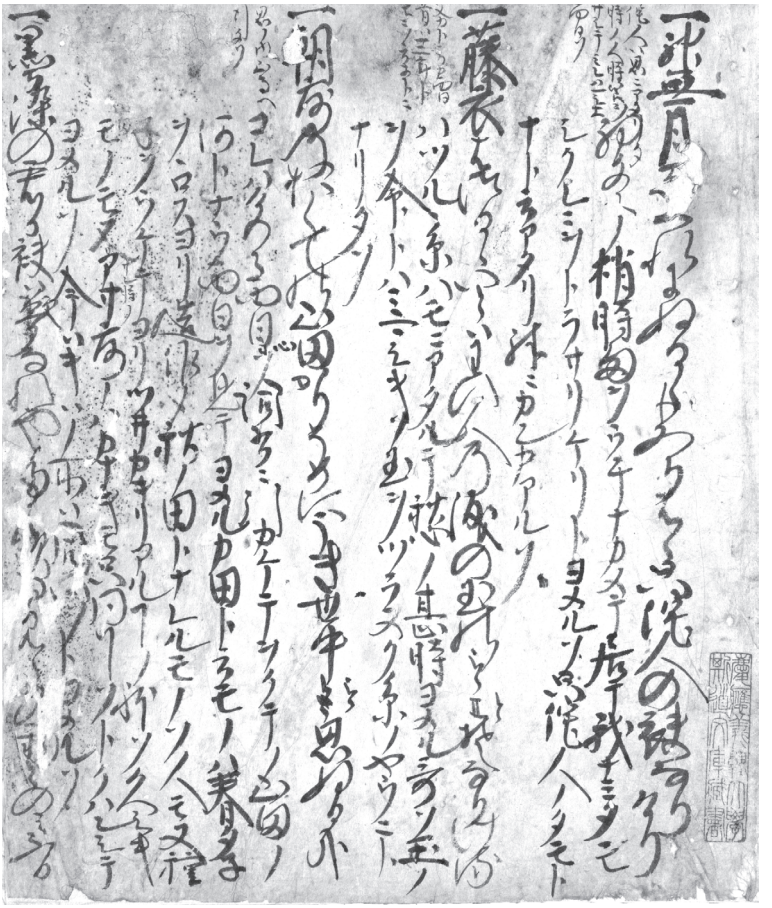
沼ノ草ノシケル下ノ水ハ行方モナキハ序ソ、下ハ身上ニ思事ノ心行ナクサム事ノナイ一生ノ躰ソ

一秋くれと月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすはかりを（463）

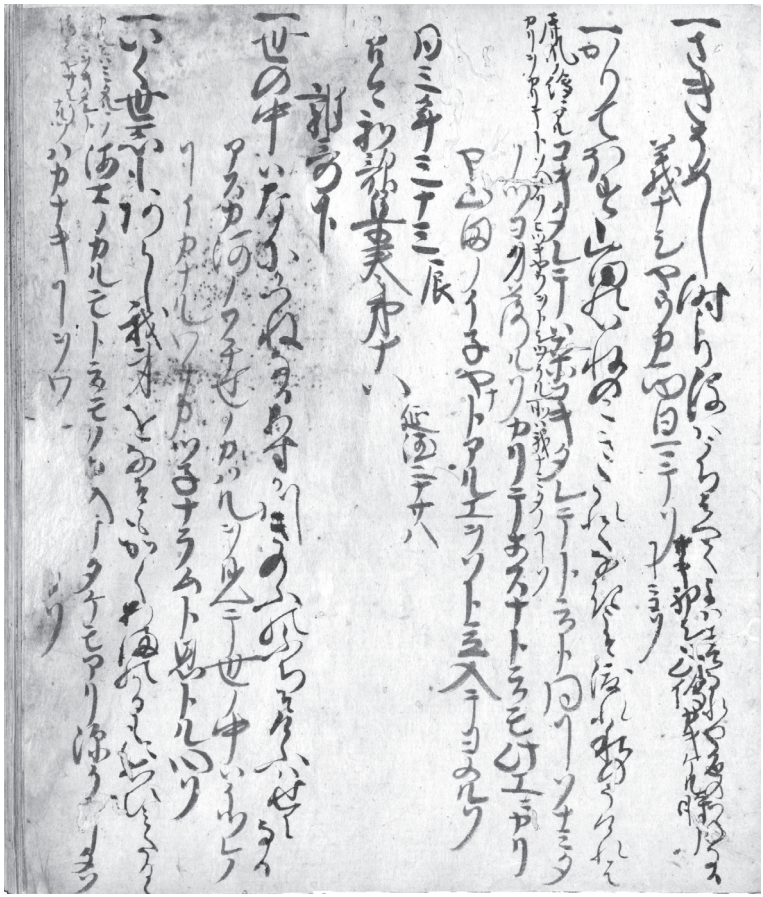
カツラノ宮ハウツマサノ桂宮院ソ、花サクモノニハ実カナルモノト云カラヨメル哥ソ、実ヤハカナルトソ」

（後欠）

（裏見返し左下）四十三□□之



本書巻頭部分



本書巻十八巻頭部分